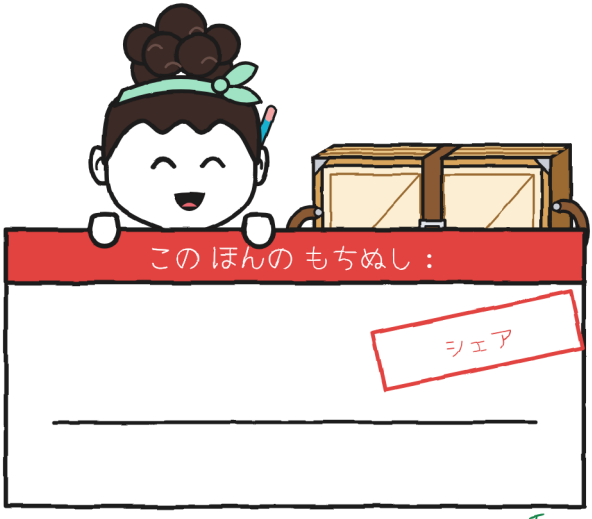


シェア。みんな はいる。 —J.

見つけたら、たたんで返してね。

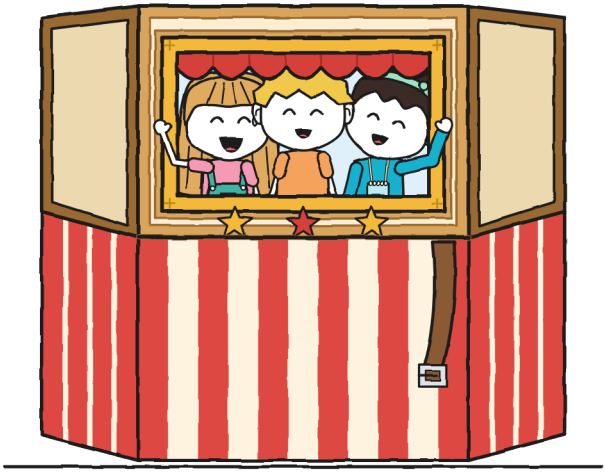
おはなしの なかだけ

この はんこは、おはなしの なかだけで おきる ことの しるし：ほんとうの ドラゴンは いないし、にもつは とんで もどって こない。ほんとうに はこぶ ときは、さいごの ページを 見てね。 —J.

ありえない はいたつ・6

ばしょは さんにんぶん

LinguAula



（グニの ノート）

サイズ **XL**・イラスト小説・13+

ありえない はいたつ・6
ばしょは さんにんぶん

シリーズの6さつめ。これまでの本は「このにもつはかみつく」「かみなりまえにあけるな」「へんそう、おねがいします」「ここじゃダメ、パンくず！」「ふたりでひとつのケーキ」。

文と絵：LinguAula

日本語版：LinguAula

サイズ XL・イラスト小説・13+

しょはん：2026

© 2026 LinguAula · info@linguaula.com

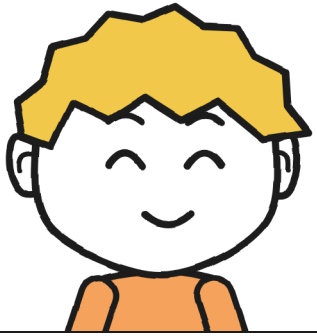
自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

フォント：Zen Maru Gothic、Yomogi、Zen Kurenaido、Andika、Patrick Hand、Caveat、Courier Prime（SIL OFLライセンス）。

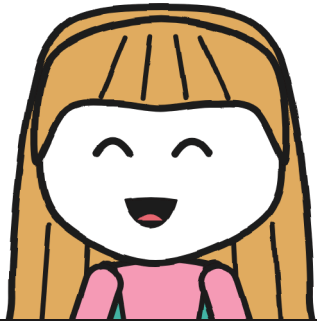
linguaula.comでしょうごとにれんしゅう

3にんで はこぶ。とっては きめた。 —J.

だれが だれ？



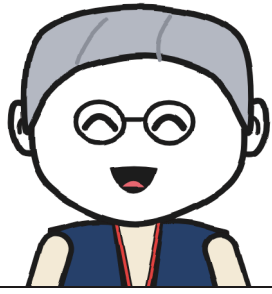
グニ。センチで はかる。こんしゅうは、ほかの こども かぞえる。



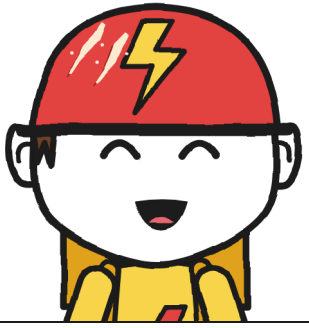
フリータ。みちは しっている。せつめいは、べつの はなし。



ノア。フリータの むかしからの ともだち。ほで はかる。ほは いつも みに つけて いる。



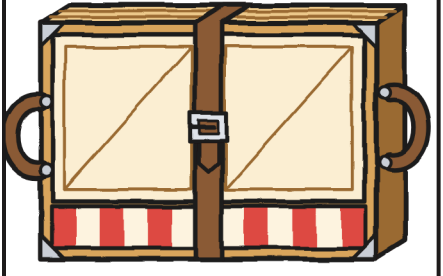
イレーネさん。げきの こうぼうを して いる。どっちへ、とは いわない。「とまれ」と いう。



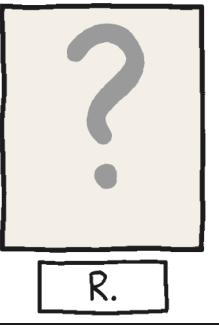
トニョ。イナズマびんと、みせの ひと。じかんを はかるだけで、いけんは いわない。ほとんどね。



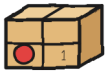
マラさん。にもつは かす。はこは はなさない。



6ばん。はこに はいる ぶたい。ベルトを だれも おさえないと、すきな ところで ひらく。



R.は さしだしひと。こんかいは、びひんリストに 1ぎょう のこした。



第 1 章

どうして 3にん ひつようなの？

ノート5は、ふたつの針が文字ばんに乗ったところで終わった。ぼくはそのまま閉じた。どちらの針にも「どいて」とは言わなかった。終わったノートは、終わったままにしておくものだ。それがいいところで、もう、だれにも言い争えない。

6番はオレンジ色だ。みかんのオレンジ。急いでいなければ、ひとつながりにむけるやつ。すみには、店のはんこもおしてある。マラさんはそれをカウンターに置いた。ピンクのノートのとなりに。それから、もう片づいている箱を片づけに、奥の部屋へ行った。マラさんはノートをわたさない。見る場所に、置いておく。

最初のページには、ぼくなりの決まりがある。2番には「公式」、3番には「ひみつ」、4番には「決定版」、5番には「しずか」と書いた。かぎのかかった言葉が4つ。その4つとも、ぼ

くより先にフリータが読んだ。今回は、それをわかっている言葉をさがした。

いちばん上に「グニのはいたつノート6」と書いた。ノートには、そう書くものだ。その下に、たった一つの言葉：

シェア。

そして、ページの半分をあけておいた。念のために。何の念のためかは、わからなかった。でも、すぐにわかった：1分もあいていなかったのだ。

フリータはカウンターのむこう側にいた。ノートを見せてとは言わなかった。指一本でひっぱって、みどりのペンのふたを取って、あいている半分に書きはじめた。字が大きすぎて、はしまで行ってしまい、ちょっと考えて、はしの外にまで書いた。それから「わたしじゃないよ」という顔をして、ペンにふたをした。この店では、もうだれの顔でもある顔だ。

1ページ目は、わたしの字でシェアした。 —J.

どれだけ使ったか、はかってみた：下の半分、ぜんぶ。ぼくの言葉は、まわりにあけておいた空気ごと、上の半分を使っていた。ふたつの半分。とてもまともな分けかただと思った。

いつものことだけど、ほかのノートを読んでいない人のために書いておく。店の名前は「ありえない はいたつ」。店主はマラさん。魔女(まじょ)で、むらさき色の帽子(ぼうし)をかぶっていて、はんこをおすと、火を消したろうそくのにおいがする火花が飛ぶ。左の棚(たな)には「もどってきた荷物」をしまっている。だれにもとどけられなかった荷物で、送り主はぜんぶR.だ。受けとった人が消えないインクでラベルにサインしないと、夜明けに、荷物は飛んで棚(たな)にもどってしまう。はじめは20こあった。フリータとぼくは、これまでに5つをとどけた：ドラゴンのたまご、足の生えたたね、ベル、「とうちゃく」ひとそろい、それにエリアさんのパン屋の台。かべには、みどりの字で「のこり15」と書いてある。イナズマ便のトニョは、ふせた箱の上に、いすの横に、自分の場所を持っている。いまのところは。

月曜日、エリアさんのメモの次の日、ぼくは学校から店にまっすぐ行った。フリータがカウンターで、ふうとうを一つ持ってまっていた。ぼくの知っているふうとうの色、みどりでも青でもなかった。ターコイズ色で、まだとじたままだった。指二本で、すみをつまんでいた。やけどしそうな持ちかただった。

「郵便やさんが持ってきたの。『ありえない はいたつ』あてだって。しばらくあけてない」

「どのくらい？」

「28分だぜ」と、トニョが自分の箱から、時計を見ながら言った。「この町の記録だ」

店の中でも、ヘルメットをかぶっていた。ヘルメットには、つめのひっかきあとが二本ある。時計は、そでをまくる時間がおしいので、そでの外側につけている。

ぼくはフリータを知っている。とじたふうとうがフリータの手の中にあるのは、そのふたを見つけるまでのあいだだけだ。28分は、がまん強さじゃない。何か別のものだった。何かは、わからなかった。

わたしのじゃなかった。わたしのじゃないふうとうは、3ばい重い。 —J.

マラさんはつめで開けた。紙をひつようより多くやぶらなかった。中の手紙は、はっきりした大人の字で、行のおわりがまがらない字だった：

「わたしはイレーネ、地域センターの演劇工房の担当です。びひんリストを更新していて、1行見つけました：『おりたたみのミニぶたい：うけとりまち』。そちらにありますか？31日の土曜日は、町のラリーです。ミニぶたいがたたんだまま、うちの中庭にとどいたら、3人のチームがはこんできた場合、その場でサインします。ノアのチームには3人分の場所があって、いまはノアだけです」

その下に、べつの字で、小さくまっすぐに、ターコイズで：

「フリータ、わたしだよ！ いま、演劇をやっているの。荷物に詳しいだれかを連れてきて。ーノア」

フリータは名前を読んで、口の片はしだけが上がった。かたほうだけ。話すつもりのないことを思い出したときのように。「ノア」と、小さく言った。何回も通った道の名前を言うみたいに。

「荷物に詳しいだれか」。それはぼくだ。「荷物」の方は気に入った。「だれか」の方は、あまり。



5時に、ふたりが来た。

イレーネさんは、ファイルをかかえ、ポケットだらけの紺色のベストを着て、首からホイッスルをさげていた。短い灰色のかみに、丸いめがね。そのめがねで、店の棚をひとつひとつ見ていった。頼まれてもいないのに、棚卸しをする人みたいに。ノアは、ひもでメモ帳をぶらさげて、耳のうしろにターコイズ色のえんぴつをさしていた。かみは、高い位置のおだんごで、くるくるしたカールを、ミントグリーンのスカーフでとめている。セーターはターコイズ色で、ふうとうと同じ。何もかも、さがさなくていいように、おくべき場所にあるみたいだった。

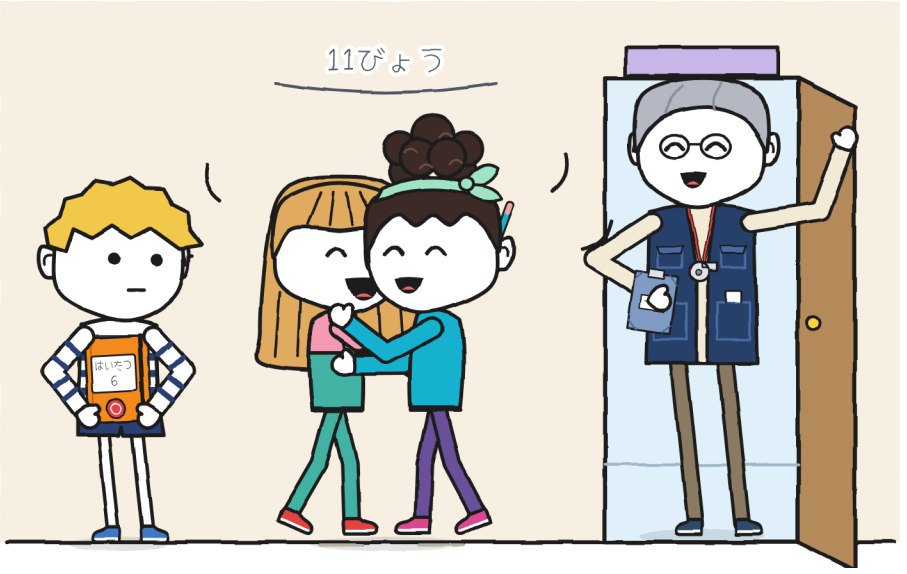
フリータはカウンターの戸を開けずに、下をくぐって出て、ふたりはだきあった。だきあっている時間は、はかる時間があるほど長かった：11秒。ぼくは横に立って、ノートを持っていた。ノートにはこういう役目もある。手に持つものを、くれることだ。

「この子がグニ」とフリータが言った。「荷物に詳しいの」

「はじめまして、荷物に詳しいグニ」とノアは言って、ぼくの名前をメモ帳に書いた。

名前を書いた。ついさっきつけられた、ぼくの「荷物に詳しい」という名字もいっしょに。立っている場所から、ぼくが

ページの2行目なのが見えた。1行目は「フリータ」で、下に線が引いてあった。もうすんだことみたいに。



マラさんは青いいすに乗って、棚から6番をおろした。ほかと同じ箱。大きくも小さくもない。ラベルはタイプライターで5行：6番。中庭の工房。ふたつのドアから入る。たたんでわたす。そして下に、いつもの、さしだしひと：R.まわりには、「へんそう」のはんこが9つ。

「はんこが9つ」とフリータは言った。

「『ふたつのドア』」とノアは読んだ。「ふたつのドアって？」

イレーネさんは知らなかった。マラさんも。ぼくは、はてなマークをつけてメモした。わからないことがあって、気がついたことだけは残しておきたいときに、ぼくがすることだ。

「9回持っていったわ」とマラさんは言った。「月曜日はさいほうのグループが開けてくれた。水曜日はコーラス。金曜日はチェス。『工房？ ここじゃないよ』って。工房あてのサインは、だれもしてくれなかったの」

話を聞きながら、3つのこまにかいた：箱をかかえたマラさんが、いつも同じドアの前に立っている。ドアの中には、順番に、糸の通った針、音符、チェスの馬。馬はなにも言わない。チェスは黙ってするものだから。その下には、夜明けの店のまどから、箱が入ってくるところ。9回。

「演劇は中庭で練習しています」とイレーネさんは言った。「そして、中庭にはベルがありません」

ファイルを開いて、マラさんにセンターのはんこのついた紙を見せた。マラさんは、鼻をぐっと近づけて読んだ。本気で受けとめるつもりのことを読むときの、マラさんの読みかただ。

「いま、工房はとうろくされています：『演劇の工房。担当：イレーネ』。工房あてには、もうサインする人がいま

す」

「サインする人がいるなら、どうしてマラさんが箱に入れて、エリアさんの台みたいに運ばないの？」とフリータが聞いた。

「箱に入れて、もう9回運んだわ」とマラさんは言った。「これからは、受け取る人が条件を決めるの」

「おりたたみのミニぶたいは、広場へ持っていくものです」とイレーネさんは言った。「子どもたちが町の道を運べるか、たしかめなければ。運べないなら、わたしには役に立ちません。役に立たないものには、サインしません」

「それ、もうパン屋さんで聞いたわ」とマラさんは言った。

手紙を読んでからずっと、聞きたいことがあった。なくなってしまう前に聞いた。

「どうして、3人いるの？」

本当に聞いたのだ。ふたつの取っ手のついたつつみ。ひとつの取っ手にひとり、ふたり。指をおって数えて、2になった。

だれも笑わなかった。イレーネさんは、めがねの上からぼくを見た。思っていたよりうまくはまる部品を見るときの目だった。

「いい質問。火曜日に、中庭で、あなたたちが答えてください」

マラさんは本を開いて、自分の条件を書いた。マラさんの条件は、いつも片手におさまる。自分の手で数えたら、親指がのこった：

- 6番：れんしゅうのためにかしだし。
- イレーネさんか、わたしといっしょに出る。
- たたんでもどる。
- ここでねる。

ラベルは箱につけたまま。箱はマラさんのところ。

棚でねていれば、夜明けにもどる場所がない。はんこは9つのまま。聞いてみた。 —J.



火曜日、センターの中庭に行った。歩道から、さびた鉄の門を通って入る。何重にもペンキをぬった門で、ひとりでにしま

る：はなすと、ゆっくりもどって、カチッと音がする。いいつけられないのにすわる犬みたいに。

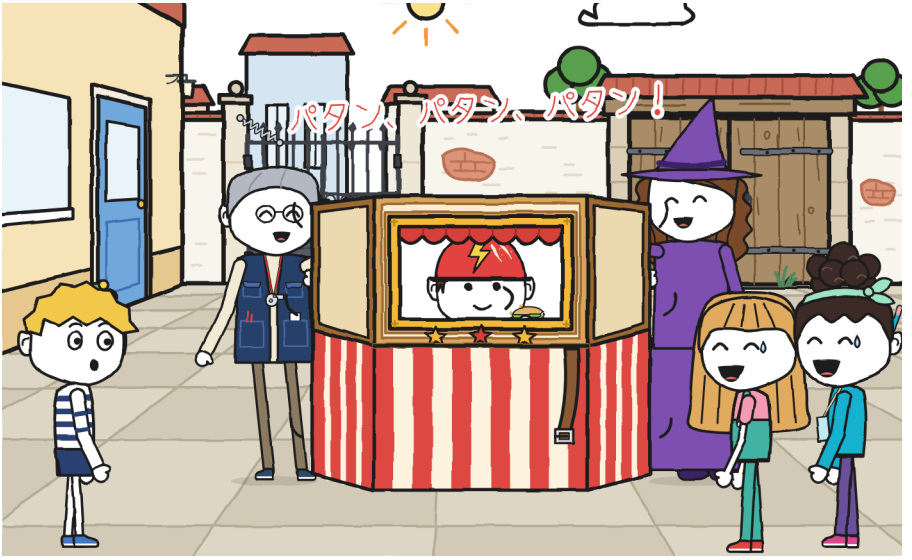
マラさんは箱を地面に置いて、ふたをはずした。出てくると、ミニぶたいは大きくなった。エリアさんの台みたいに。ぼくはもうおどろかない：メジャーを出す。

とじたミニぶたいは、木の板と布(ぬの)の、平たいつつみだった。両がわに取っ手がひとつずつ、バックルの3つの穴(あな)を通るベルトがついている。1メートルかける70センチで、横にすると、手のはばくらい。門は、とびらを開けて、90センチ。横にすれば、門を通る。そこまではかんたんだった。

何よりもまず、イレーネさんは、ミニぶたいがちゃんと全部あるかを見たがった。ベルトをはずして、つつみを回した。板が、自分の重さでひとりでに開いた。ひとつ、またひとつ：カチッ、カチッ、カチッ。3つのかべのある舞台(ぶたい)に、短いカーテンと、おくの板には、わくのついた窓(まど)。

窓(まど)からは、歩道を通りかかるトニョが見えた。サンドイッチを食べていた。口がいっぱいで、あいさつできなかった。一瞬(いっしゅん)、そこで止まった。わくの中で、ヘルメットをかぶって、

ほっぺたが片方(かた)だけふくらんでいる。おひるごはんの時間にかかれた、えらい人の肖像画(しょうぞうが)みたいだった。



「ぜんぶあるわね」とイレーネさんは言った。「工房(こうぼう)のきまり：手は取っ手に。ちょうつがいには、ぜったいに。曲がるときは、だれかがベルトをおさえる」

ぼくは、そのとおりにメモした。

イレーネさんとマラさんは、それをたたんで、ベルトをとめた。

「わたしたちでためす」とフリータが言った。ノアはもう、もう一つの取っ手に手をかけていた。

ふたりは、目を合わせて決めたりしなかった。声に出しても言わなかった。それぞれが、いつもの席に行くみたいに、自分のがわに行った。

3まで数えて、持ちあげた。持てた。中庭を1周した。ひじを少し開いて、ゆっくりと。ミニぶたいはふたりのあいだで、ゆれもしなかった。うまく運ばれるおぼんのように。門のところについた。門はしまっていた。

フリータは門を見た。ノアも見た。手はぜんぶで4つ。その4つとも、ふさがっていた。

ぼくは2メートルはなれたところで、手があいていて、ノートを持っていた。

イレーネさんは、おくで、ファイルをむねにあてて、何も言わなかった。「助けてあげて」とも、「あなたが」とも。

ぼくは背中(せなか)で門をおさえた。ふたりは通った。イレーネさんは、ファイルになにか書いた。



その日の午後、ぼくはこのノートの装置(そうち)を発明した。ぼくの道のりで5つめ、ふるえメーター、赤メーター、ここメーター、

さわぎメーターのつぎで、ひとりじゃなくて何人かをいっぺんにはかる、はじめてのだ。名前は「3にんメーター」、「区間ごとに、だれがなにをする」。区間ごとに1行、そして3つのマス。マスにはそれぞれ小さな絵：

- もつ：ふたつの手で、ふたつの取っ手。
- あんない：どこを、いつ、と言う。
- みちあけ：ドア、ふちいし、人。

1行目、「中庭、1回目」に、「フリータとノア」、「フリータとノア」、そして空のマス。2行目、「中庭、2回目」は同じで、3つ目のマスには「グニ」と書いた。

同じ名前が2つと、からのマスが1つ：通れない。マスがうまっていれば、通れる。イレーネさんへの答えは、もうできた。しかも、ぼくのだ。

そして、もう一つ、もっと小さなことをメモした：「門は、石でもおさえられる」

えんぴつを、ほとんど力を入れずにして書いた。



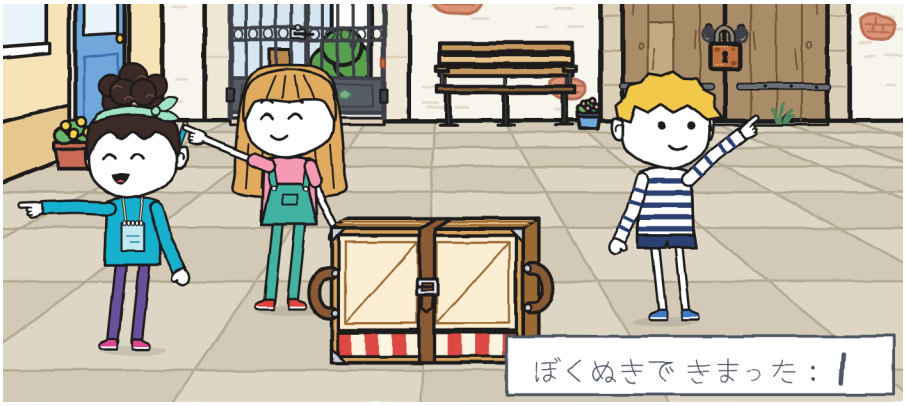
ラベルの意味が、まだわからなかった。

「『ふたつのドア』って、門の2枚のとびらのことだよ」とフリータが言った。

「どっちも開けなきゃ」とノアが言った。

「先にへいの外側をはかれるよ」とぼくは言った。

3人でいっせいにさした。フリータは門。ノアは工房の部屋。ぼくは道。



「あとで」とふたりは言った。

ふたり同時に、おなじ調子で言った。練習したみたいに。練習したんだと思う。何年も。

ぼくはひとりで行った。門を出ると、うしろでカチッと門がしまった。へいにそって、メジャーではかりながら一周した。区間ごとに、ひざの上にノートをのせて、数字をひとつずつ書

きながら。へいは長くて、水のにおいのする路地に面していた。そして、その角を曲がったところで、ぼくはなにかを見つけた。

急いでもどった。頭の中にそれを持ったまま、巻いていないメジャーを引きずって、歩道に1メートルの黄色をたらしながら。入っていくと、フリータとノアは、ぼくがこの町に来る前のできごとで笑っていた。声を立てずに、かたで笑って、ノアはフリータの腕にさわって止めようとして、フリータは止まらなかった。

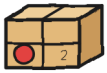
ぼくは口を開けた。

「もう決まったよ、グニ」とフリータが言った。「2枚のとびらだよ」

ページの下のすみに、小さく、えんぴつで書いた：ぼくぬきで きまった。そしてよこに、ぼうせんを1本。口は開いたままで書いた。

口をとじた。ノートも、とじた。

そのぼうせんを見たのは、2日あとだった。わたしの分だった。 —J.



第 2 章

だれが みちを しっている？

水曜日は、はじめての道のりだった。店から中庭まで、道を通って、ミニぶたいをかかえて、人に見られながら。午後の授業のあいだじゅう、ぼくはプリントのよこに3にんメーターをかいていた。新しい行と、空のマス。3人でうめるために。

店に着いたとき、メーターはもううまっていた。みどりで。

フリータがぼくのノートを装置のページで開いて、広告みたいな字で新しい行を足していた：「店 → 中庭」。もつのマスには「グニとノア」。あんないのマスには「フリータ」。みちあけのマスにも、「フリータ」。ペンは上にのったままで、ふたも開いていた。だれも隠そうとしなかった証拠みたいに。

「あなたとノアが持つの」とフリータは言った。「わたしがあんない、道を知っているから。それに、前を行くから、みちあけもする」

「来るとちゅうで考えたの」とノアが言った。

勝つために言ったんじゃない。道をおしえるときみたいに言った：本当のことだったから。ふたりは、どこかから、いっしょに来た。道すがら、考えた。ぼくは、ぼくの道すがら、おなじことを考えた。ただし、プリントのよこで。それは、来たうちには入らない。

みどりは消えない。2本めのぼうせん。



「出かける前に、地図を作ってもいいと思う」とぼくは言った。「曲がるところに番号をつけて」

頭の中で、半分できていた：店の入口、ふちいし、くつ屋さん、小さな広場、曲がるところに、丸でかこんだ番号。電車の駅みたいに。

「地図はいらないよ」とフリータが言った。「かたひれの魚まで、ずっとまっすぐ」

ノアがふきだした。フリータも。小さな笑いじゃない：ひとりから始まって、さいしょの人が終わる前にもうひとりにうつって、またもどって、だれが持っているのかわからなくなる、そういう笑い。

「どの魚？」

「かたひれの魚は、かたひれの魚」とノアが言った。まだ体をおりまげたまま。

「長い話だよ」とフリータが言った。

「しかも、すごくいい話」とノアが言った。

ぼくはまった。えんぴつを空中に持ったまま、その話をメモする用意をして。道の役に立つかもしれないから。話してはもらえなかった。ふたりは少しずつ落ちついて、そでで目をふいて、でも、ひとりがもうひとりを見ると、しゃっくりみたいに、また少しもどった。

えんぴつをおろした。3本めのぼうせん。



マラさんは店の入りぐちの歩道で、箱からミニぶたいを出した。箱は、ラベルと9つのはんこといっしょに、中に残った。

ノアはベルトを1つめの穴にとめた。

「こうしておくと、着いたとき早くはずせる」

いい理由だった。メモした：「穴1：早くはずせる」。そのほかのことは書かなかった。そのほかのことは、まだ知らなかったから。

ぼくが前、ノアがうしろで、ふたりとも片手を自分の取っ手に。前からは道が見える。うしろからは、ミニぶたいしか見えない：目の前に、1メートルの木と、ぬった布。たんすのうしろを歩いているみたいだ。ノアはもう一方の手を、ベルトの近くに置いていた。くせか、イレーネさんのきまりで。そして小さな声で数えていた。歩数を。前から、聞こえた：「…21、22…」。ほかの人が鼻歌を歌うみたいな調子で。

イレーネさんは、いちばんうしろに。ファイルとホイッスルを持って。どこを行くかは言わなかった。「とまれ」と言うのは、ふちいしがあるときだけ。一回だけ、声を高くせずに言った。止まると、道ぜんたいがいっしょに止まったみたいだった。

フリータはみちあけがとてもうまかった。数歩前を、うしろ向きに歩きながら、トラックをバックさせる人みたいに腕をふって。

「どいてどいて、ぶたいが通るよ！」

くつ屋さんが見に出てきた。くつを半分ひもを結びかけたまま手に持って。犬を連れたおじさんが、げんかんのところで待っていた。犬も待った。そのほうがむずかしい。遠くの、町の反対がわで、ベルが鳴った。チリン。

「イナズマは自分たちのコースをれんしゅうしているの」とノアは言った。「むこうは自転車でふうとうを運ぶ。わたしたちは歩いて、これを運ぶ」

「これを持って走ってはいけません」とイレーネさんは言った。

トニョが月曜日に話してくれた：イナズマの場所ごとに、3人いっしょに着かなければ、数えない。そのとき、何のためかわからずにメモした。

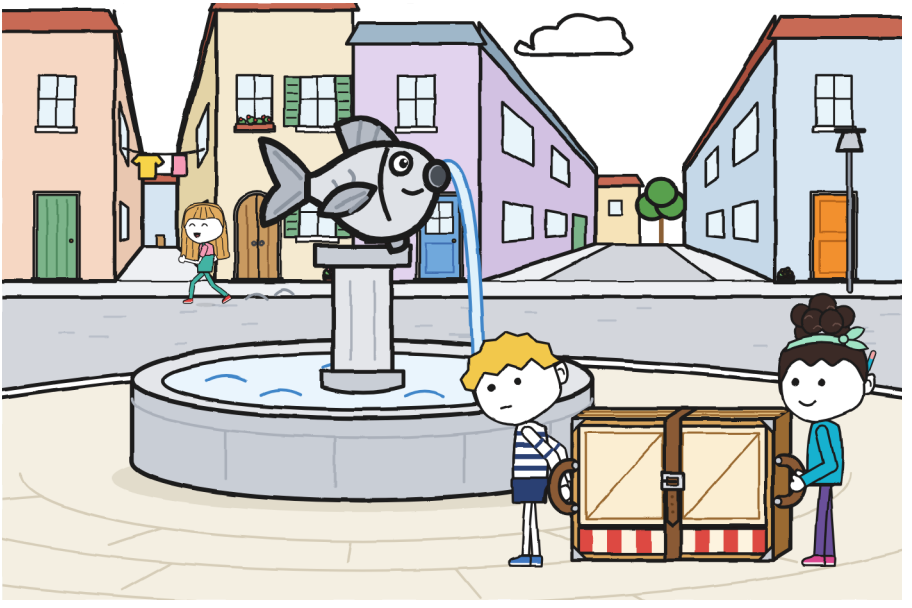
ふんすいのある小さな広場に着いた。丸くて、まわりにベンチがあって、だれがいても動かないハトがいる。フリータは、

ふりむいて、指示を大声で言って、広場のまん中へ走っていった。門をおさえに行くために。

「かたひれの魚まで、そして曲がる！」

そして、もういなかった。オーバーオールが、人と人のあいだに一瞬見えて、それから、何も。

ふんすいのまん中には、石の魚がいる。短い柱の上で、何か言おうとして、やっぱりやめたみたいに口をあけている。よく見た。ぼくの側からは、ひれは全部あった。



急いで考えた。それはぼくの得意じゃない。ぼくの得意は、ものさしを持って、ゆっくり考えること。でもミニぶたいは重いし、ノアはうしろで何も見えないし、道は、まわりでどんどん進んでいる。ノートを取っ手にもたせて、2行書いた：

1. ふんすいの魚：ひれは見えている、ぜんぶ。かたひれじゃない。ほかに魚がいるはず。
2. 曲がる：どっちへ？ 左は、せまい道。右は、広い道。ミニぶたいは、広いほうがいい。

その下に、右への太い矢印。申しぶんのない推理（すいり）だった。まちがっていたのは、最初だけ。

「もう曲がる？」とうしろに聞いた。

「かたひれの魚で！」とノアがミニぶたいのうしろから言った。

ノアには、木しか見えない。そこからでは、かたひれの魚は言葉で、その言葉はちゃんと言われていた。

ほかの魚をさがしつづけた。げんかん、かんばん、さかなやさんだと思ったら金物屋さんだった。いなかった。右に曲がった。

だれも「まがる」と言わなかった。だれもベルトをおさえなかった。1つめの穴では、バックルはあまり持たない。

カチッ。カチッ。カチッ。

板が、ゆっくり、ひとつ、またひとつ、ノアのまわりに開いた。だれかが中から開けるアーティチョークの葉みたいに。イレーネさんがホイッスルをふいた。音がやんだとき、道のまん中に、ぶたいがあった。そして、ぶたいの中に、ノア。

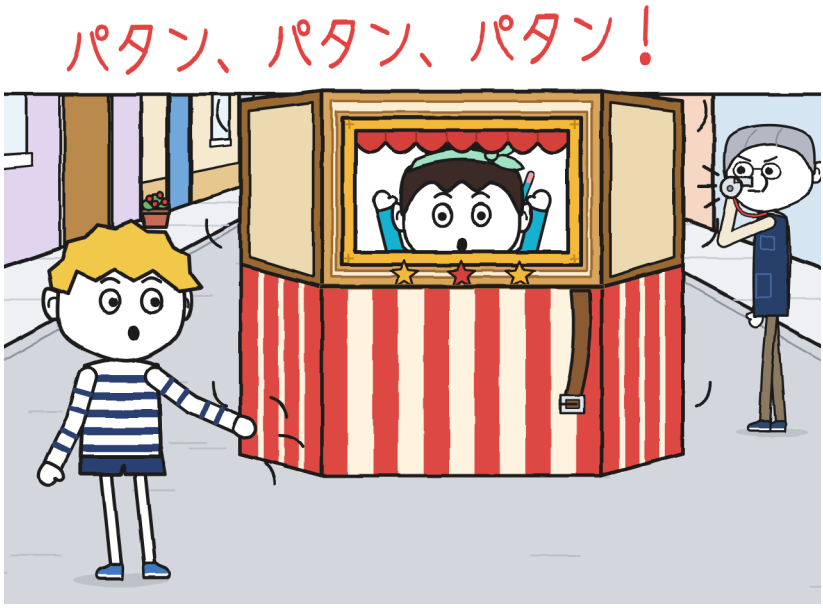
「こんにちは」と、まどから言った。

言われたとおり、手を高く上げていた。ちょうつがいからはなして。ベルトは地面まで垂れていた。ぼくはまだ取っ手を握っていたが、もう何の取っ手でもなかった：舞台のふちだった。

イレーネさんは、ノアの手を見た。それから、ぼくの手を。ほんとうに、指いっぽんずつ、りょうがわを見た。みんなぶじだった：板は軽くて、ゆっくり開く。

「だれが、あんないしていましたか？」と聞いた。

だれも答えなかった。あんないしていた人は、2つ向こうの通りで、門をおさえていた。



イレーネさんとぼくでたたんだ。手は横棒（よこぼう）に、急がず、一枚（まい）ずつ。ノアは、もう外に出て、ベルトをとめ直して、こんどは2回ひっぱった。そのあいだに、はかった：ぼくの足からふんすいまで、4メートル。メジャーをまだ地面にのばしたまま、ぼくのくつから石のふちまで、メモした。

フリータが走ってもどってきた。

「だって、かたひれの魚のところって言ったでしょ！」

「どのかたひれの魚？」

「あれ！」フリータはふんすいを指さした。「左へ。いつもの とおり」

「『いつも』は、ぼくが来る前のことだよ」

おこって言ったんじゃない。日づけを直すみたいに言った。フリータは、ふんすいに腕をのばしたまま、1秒だけ長く止まって、それからイレーネさんのほうを向いた。イレーネさんはファイルを開いていた。

「グニが まいごに なったの」

ぼくは、まいごじゃなかった。どこにいるか、ちゃんと知っていた：ふんすいから4メートルのところ。はかったばかりだった。

ノアは、ぼくたちを順番に見ていた。メモ帳をセーターにおしあてて、閉じたまま。イレーネさんは何か書いた。何かは言わなかった。

それも、ぼくぬきで決まった。4本めのぼうせん。

大きな声で、人の前で言った。わかっている。 —J.

魚の反対がわを見せてもらった。3人でふんすいをまわった。ミニぶたいをたたんで、ノアとぼくのあいだにはさんで、

イレーネさんがうしろ。左のひれが、ない。店からの道で来ると見えない：魚は、写真にうつる人みたいに、いいほうの側を見せる。見るには、ないと知っていなければならない。

両がわをかいた。ならべて。おなじ魚、ふたつの魚。

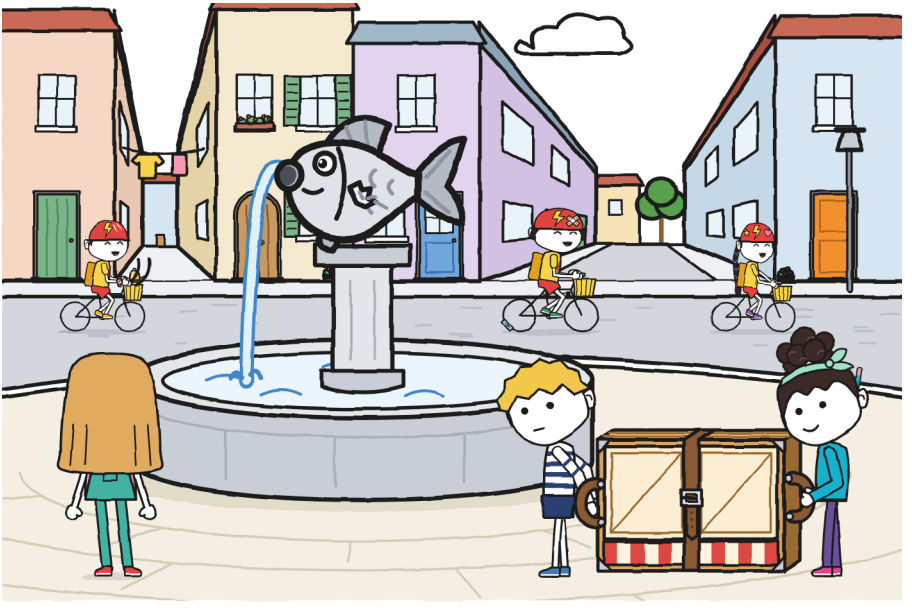
曲がりをやり直した。道の入口の、何メートルかうしろにもどって、もう一度。こんどは、フリータがぼくのとなりで。1回目は「まがる」を早すぎる時に言ってしまって、ノアは、玄関（げんかん）の前でベルトをおさえた。意味もなく。2回目は遅（おそ）すぎた：ミニぶたいが半分カーブに入って、ノアがベルトをさぐっていた。3回目はできた。うまくできた、カチッもなしで。でも、だれもしゃべっていなかった。いつもしゃべるフリータさえ。

そのとき、イナズマが車道を通った：ゾエ、ブルーノ、トニョが1列で、ハンドルに手をかけて。かどでチリン。ゾエが先頭で、三つあみが風になびいている。ブルーノが真ん中で、かごにふうとう。トニョが最後で、指をベルにのせて。ブレーキもかけず、ぶつかりもせず、ふんすいを一周した。いつも同じはなれかたで、けっして追いつかない時計（とけい）の針（はり）みたいに。

「チェックポイント1、1回でクリア」と、トニョは通りすぎざまに言った。

ぼくたちのために言ったんじゃない。トニョは、聞く人がいなくても、数字を大声で言う。それがイナズマだ。でも、聞こえた。

フリータは、うでをだらんと下げていた。フリータのうでは、下がっていることがない：行って、来て、指さして、みちをあける。その午後、ベルの音が遠ざかるあいだ、ミニぶたいのない取っ手みたいに、両わきにぶらさがっていた。



ほとんど夜になって、中庭に着いた。さいごの区間は、あんないがいらなかった：門が見えたから。フリータは手で門をおさえて、「どいて！」とは言わなかった。マラさんが中でまっていた。ミニぶたいを箱にしまって、店に持って帰って、棚でねかせた。

その日のことを、3にんメーターに書いた。みどりの行の下に、新しい列を、細く、えんぴつで足した：「開いた ・ 3回やり直し」。3つのマスにはどれも名前があったのに、道で、ぶたいが開いてしまった。メーターには、何かが足りなかった。何かはわからなかった。となりに、大きなはてなマークをかいた。町についての質問じゃなくて、装置についての質問のときにつけるサイズの。

その行に、わたしの名前が2回出てくる。でも、どっちの時もわたしはいなかった。 —J.



家で、ごはんのあと、机のライトをつけてすわって、ノートを最後のページで開いた。

そこに、火曜日にへいのうしろで見つけたものをかいた。注意して、ものさしを使って、ひざにノートをのせてメモした

メートルで。とてもよくかけた。とてもよくかけたので、えんぴつを止めて、しばらく見ていた。

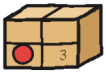
お母さんが、おやすみを言いに、ドアから顔を出した。そのとき、ぼくの手はもう、絵の上にあった。おやすみを言って、ぼくの手を見て、何も聞かずに、ドアをしめた。

ひとりなのに、手でかくした。はしからは、へいの一部と、半分のかぎがのぞいていた。

思った：「あした、またまちがえる。そのときに出そう」

いい計画だと思った。時間も決めてあった。

このページを読んだのは木曜日。気に入らなかった。水曜日の、わたしのも。 —J.



第 3 章

グニの ちずは やくに たつ？

その夜、手がかくすのにつかれたとき、ぼくは地図をぜんぶかいた。

中庭を、上から見た図。ハトが見るみたいに。へいは、区間ごとにはかって、火曜日にひざの上でメモした数字をそのまま。門は、ひとりでにしまる矢印つき。ふんすいは、魚をわるい側からかいた。もうだれもだまさないように。店は、すみに、小さく。3つの区間には、丸でかこんだ番号。そして、へいのうしろに、火曜日のもの。

とてもいい地図ができた。ぼくがかいた中でも、いちばんいいほうだ。たくさんかいてきたけれど。机（つくえ）のライトをななめにして、えんぴつのかげが入らないようにして、しばらくながめた。それから4つにおって、つめでおり目をおさえて、ノートの中の、まったく関係のない2ページのあいだにしまった。

木曜日、店で、ノアが数えていた。

歩道の、ショーウインドーの前で、ふちいしのほうへ、長さのそろった大きな歩幅（ほはば）で歩いていた。足もとは見ない。前を、行くさきを見て、くちびるを動かしていた。

「ドアからふちいしまで、6歩。ふちいしから街灯まで、11」

「それは、メジャーではかるものだよ」とぼくは言った。

「わたしは歩ではかる。いつも身につけているから」

考えた。本当だった：メジャーは、出して、のばして、足でおさえて、それからひとりでに巻（ま）きもどって、指をかむ。歩幅（ほはば）は、家にわすれてこない。

「きみの1歩は、どのくらい？」

「1」

ノアの1歩をはかった。店のゆかにメジャーをのばすと、ノアは、自分のいつもの大きな1歩を、考えもせずに、サインするみたいにふみだした。しゃがんで、目もりを読んだ：58センチ。ノアは自分のメモ帳に書いた。ぼくは自分のノートに。ふ

たつの字は、おなじことを言っていた：「ノアの1歩＝58センチ」。

「あなたのは？」とノアが聞いた。

知らなかった。はかってみた。メジャーの上で1歩、ふつうの、学校に行くときの歩きかたで。ぼくは足を動かさずに上から読めなかったので、ノアがしゃがんで読んでくれた：51センチ。ノアはそれも書いた。ぼくは一生、歩幅（ほはば）を身につけてきたのに、一度も数えたことがなかった。

フリータは、カウンターから、うでを組んで、まゆを片方（かた）上げてぼくたちを見ていた。ふたつの時計（とけい）が同じ時刻（じこく）をさすのを見る人みたいに。

ノアは、もうひとりのフリータだと思っていた。ちがう。ノアは数える。



イレーネさんと中庭に行った。フリータとノアは、自分たちの考えをためしたかった：門の2枚（まい）のとびらを、両方開ける。

1枚（まい）めのとびらは、ひとりでに開いてしまる：知っていた。2枚（まい）めは開かなかった。ふたりでひっぱった。それぞれ両手で、

足を地面にふんばって、フリータは赤くなって、ノアは大きな声で3まで数えて、3で、何も起きなかった。イレーネさんは、しゃがんで見た。ペンキの上にペンキがぬってあって、地面に、太い指ほどのネジがとびらをとめている。

「じゃあ、ラベルがまちがってるんだ」とフリータが言った。

「きっとそう」とノアが言った。

2秒で決めた。数えた。ぼくはぼうせんのために、えんぴつを出した。5本めだった。

引かなかった。

えんぴつは、紙から指1本のところで止まった。ページのすみの、ぼうせんの列を見た：4本、きれいにかいて、まっすぐで、どれも同じ大きさ。とても気をつけてかいた。そして、1本足りなかった。

火曜日、へいのうしろで、ぼくも、だれにも聞かずに決めた：だまっていること。

「ぼくぬきで きまった」の下に、おなじ字で、えんぴつで、もう1行書いた：「あのふたりぬきで きめた」。そして、ぼうせんを1本。ほかのより、少しまがった。

「ラベルはまちがってない」とぼくは言った。思ったより大きな声になった。「中庭には、もうひとつドアがある。うしろの、運河（うんが）の路地に。古くて、かぎがかかっている。火曜日に見つけた」

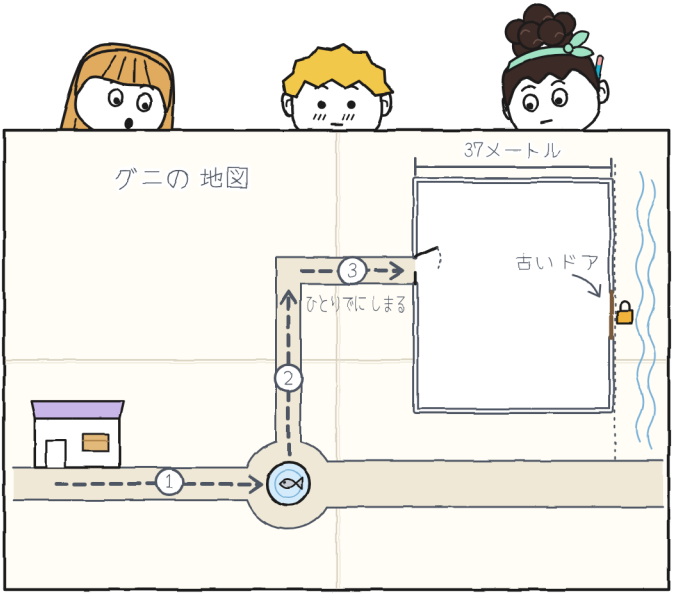
ページのあいだから地図を出して、ゆかに置いたたたんだミニぶたいの上に広げた。テーブルのかわりだ。おり目で、地図は、まどのように十字に4つに分かれていた。

「火曜日？」とフリータが言った。

「火曜日。あとで、ぼくが正しかったと言えるように、しまっておいた」

3つの頭が、紙の上にかがんだ。へい：37メートル。片（かた）がわに、門と、「ひとりでにしまる」。反対がわに、2枚（まい）のとびらの、かぎが前から見えるようにかいてあるドア：ふるいドア。

しばらく、だれも何も言わなかった。はかった：長かった。へいのむこうから、チェスの音がした。駒（こま）が盤（ばん）に当たる音、ときどき。急がない時計（とけい）みたいに。



「わかった」とノアは言った。そして、地図に、そのドアをうつした。

ターコイズのえんぴつで、ていねいに、ぼくの地図のこまを、先で数えながら、場所をきめて。それ以上は何も聞かなかった。ノアにとって、あるドアは、メモするドアだった。

フリータは「わかった」と言わなかった。足を動かしていた。赤いくつが、中庭のゆかをいったりきたりして、トン、トン、トン、ぼくの知っているリズムで：すぐには言わないことのリズム。

「きのう、あれがあったら、すごく助かった」

「うん」

きのう、ぼくは地図をノートに入れたまま、ノアがぶたいの中にいるあいだ、足からふんすいまで4メートルをはかっていた。

中庭には、すみっこがない。さがしもしなかった。ぼくは、その場に立ったまま、地図を広げて、両手をのせた。風にさらわれないように。

「わかった」と言わなかったのは、まだ本当じゃなかったから。 ―J.

3人で見に行った。イレーネさんもいっしょに。門を出ると、うしろでカチッとしまって、へいをまわった。ノアが小さな声で、くちびるで数えた：64歩。ぼくはもう知っていた：37メートル。暗算した、64かける58、37と少し。同じだった。

ぼくがそう言うと、ノアはぼくを見た。何も言わなかったけれど、自分の歩数のよこに「37m」と書いて、ぼくもぼくのメートルのよこに「64歩」と書いた。

運河の路地はせまくて、止まった水のにおいがする。おくに、てすりが見える。そのうしろに、運河が、こちらを見ずに流れている。ふるいドアは木で、2枚で、巨人のベッドくらい広い。ノアは、はしからはしまで、はかった：3歩。ぼくは：1メートル75センチ。門のほとんど2倍。木は、雨に打たれて、灰色になっている。かぎは、かぎよりも、さびのほうが多い。

フリータは、指のさきでさわった。かみつくかもしれないものにさわるみたいに。

「何年も、しまったままです」とイレーネさんは言った。「わたしはずっと、このすがたしか見たことがありません」

イレーネさんは、ファイルの中のセンターのとうろくを、1枚ずつ、ぬらした親指でめくって、きいろい紙までさがした。

「ここにあります。このドアが使われていたころ、中庭へは入口が2つありました：門か、ここです。『ふたつのドアの中庭』と呼ばれていました。そして、どのグループの中でも、中庭で練習しているのは劇だけです」

紙には、インクでかかれた古い中庭の図があって、ふたつのドアと、ことば：ふたつの ドアの なかにわ。ぼくのと似ていた。もっと古くて、はかりかたはもっと下手だけれど、似てい

た。ドアを数えた：2つ。ぼくのも、2つ。ほかの人の地図が、ぼくに同意してくれたのは、これがはじめてだった。しかも、ぼくがこの町のどこにいるかを知るよりずっと前に、だれかがかいたものだった。

「じゃあ、ラベルはなぞなぞじゃないんだ」とノアが言った。

「住所だよ」とぼくは言った。

『なかにわの こうぼう。ふたつの ドアから はいる』。ちゃんと書いてあった。ただ、古かっただけ。

あとで、マラさんは、そのかぎを9回見たと言った。しまったドアは、もう数えないと思っていた。 —J.

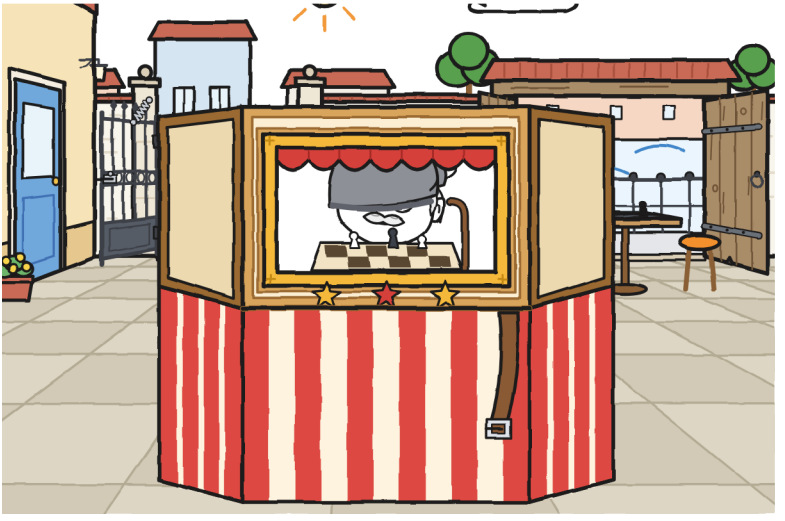
かぎは、ファイルの中の、ふうとうに入っていた：『ふるいドア。なくさないこと』。イレーネさんは、2本の指でそれを出して、ずっと会っていなかった人を見るみたいに見て、かぎをあけた。かたかった。最初は回らなくて、それから、いきなり回った。ドアは、船のきしむような音を立てた。

中に入ると、中庭では、チェスの人たちが、テーブルを日なたに出していた。だれも頭を上げなかった。何年もしまっていたドアが、すぐそばで、船のきしむような音を立てて開いて

も、チェスの人たちは頭を上げない：それも、勝負のしかたのひとつだ。

イレーネさんは、まん中でミニぶたいを開いた。ふたつのドアの間に、どれくらい場所があまるか見るために。ノアとふたりで、ふたりとも手を横棒（よこぼう）に。カチッ、カチッ、カチッ。たっぷりあまった。

ミニぶたいの窓（まど）から、アントニオさんが見えた。ベレー帽（ぼう）を目の上にのせて、ステッキをひざにはさんで、盤（ばん）の前に。つぎの一手を考えていた。すこしいびきをかいていた。わくの中の姿（すがた）を、しばらく見ていた。絵がかわらないように、動かなかった。



「土曜日は2つとも開けます」とイレーネさんは言った。「自転車は、運河の路地から、ふるいドアに。歩いて荷物を運ぶ人は、歩道から、門を通る。そうすれば、ぶつかりません」

「でも、ふるいドアのほうが広い」とフリータが言った。「それに、ひとりでにしまらない」

「それに、門はあなたたちのものでしょう。工房がミニぶたいを広場に運ぶなら、もっとひどいドアもありますよ」

フリータは口を開けた。言おうとした文を用意したまま、しばらく開けていて、言わなかった。ノアを見た。ぼくを見た。

「グニは どう 思う？」

この1週間で、はじめてだった。日づけといっしょにメモした：「木曜日 29日。『グニは どう 思う？』」。答える前に書いた。答えを考えているあいだに、質問をわすれないように。

ぼくは、門、ただしれんしゅうしてから、と言った。ノアも同じことを言った。フリータは「わかった」と言って、こんどは半分、ほんとうだった。前よりも半分。

そのあと、メーターをなおした。ミニぶたいの上に置いた。たたんだミニぶたいは、まだ2日なのに、もうぼくたちのいつ

もの机になっていた。3つのマスは、きのうのことにも、ぼくのことにも、役に立たなかった。

新しいマスは、3人でかいた。ぼくは、わくを、えんぴつで。フリータは、名前を、みどりで。ノアは、小さな絵を、ターコイズで：ラジオから出るみたいな線のある口。

- しらせ：知っていることを言う。

水曜日の行の新しいマスに、フリータは書いた：「だれも」。火曜日の行には、ぼくが書いた：「グニ、なし」。ゆっくり、いつもの字で、大きくも小さくもなく書いて、消さなかった。

3にんメーターには、マスが4つある。もんくは言わない。4つめが、いちばんむずかしい。 —J.

ふんすいを通ってもどった。夕方で、水はノートの色になっていた。魚の前で止まった。ひれのない側。水曜日と同じにひれはなかったけれど、もう、見かたを知っていた。

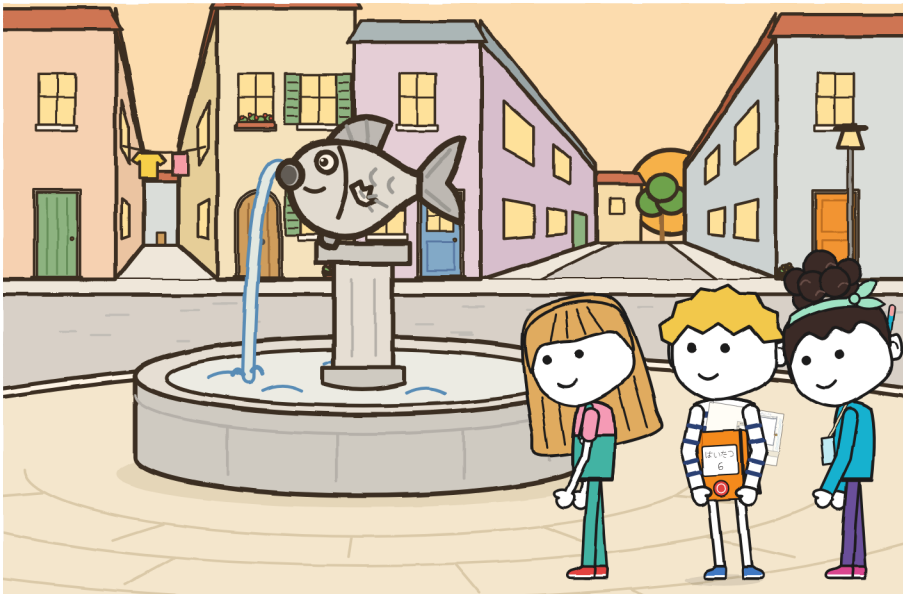
「その話、おしえてくれる？」

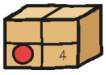
フリータとノアは、目を合わせた。笑わなかった。水曜日の笑いの、すみっこが顔を出して、それぞれ自分のぶんをしまった。

「長い話だよ」とフリータが言った。

「土曜日に」とノアが言った。「たどりつけたらね」

「いや」じゃなかった。ぼくは地図をノートにしまった。こんどは、おらずに、半分のぞいたまま。





第 4 章

だれでも しきれる？

金曜日、トニョは時計（とけい）とえんぴつと、イナズマの申しこみ用紙をクリップでいたにとめて、店に来た。用紙はカウンターに置いた。まだ勝っていないトロフィーを置くみたいに、ぼくたちに見えるように。

ご近所ラリー・土曜日31日。チーム：イナズマ。その下に、番号つきで3つの名前：ゾエ、トニョ、ブルーノ。ぜんぶ同じとがった字で、トニョの字じゃなかった。消された名前は、ひとつもなかった。

「ゾエが書いたんだ」とトニョは言った。「ブルーノが言ったとおりに。『ブルーノ、てんてんつき』って」

「ゾエは？」

「ブルーノが書いた。てんてんつきで」

たしかめた。てんてんはあった。とてもしっかりした、だれかにえんぴつを見られているときに書くような。

それからトニョは、「とりあえず」の箱にすわって、時計(とけい)をゼロにもどした。カチッという音が、店じゅうにひびいた。

「きょうは、時間をはかる。意見は言わない。やりなおしたところを書く」

トニョはイナズマで、店の人でもあって、その日の午後は、ふたつを同時にやる方法を見つけたみたいだった：いたの上には、チームの用紙。手首には、ぼくたちの時間。



考えが3つあった。ひとり1つ。ノアのは、リレー。3つの区間で、区間ごとに、ちがう人があんない。ぼくのは、あんないとみちあけを同じ人がやること、つまり手があいている人が。持つふたりには、ミニぶたいしか見えないから。水曜日にぼくも持つほうだったからわかる。見えたのは、おもに、ぬった(ぬの)布だった。フリータのは、すぐ出発すること。

ぼくは、先に、地図で道ぜんぶを見なくちゃと言った。

「歩きながら見よう」とフリータは言った。

フリータが勝った。歩きながらだと、道はとても早く見える。

「最初はだれがあんない？」とノアが聞いた。

3人いっぺんに指さした。火曜日にもやって、それぞれちがう場所を指さした：門、部屋（へや）、道。こんどはだれも場所を指さなかった。ぼくはノアを、ノアはフリータを、フリータはぼくを指さした。3本のうでがわになって、回るつもりのない車輪のスポークみたいに、まん中の床（ゆか）には、たたんだミニぶたい。だれも自分は指さなかった。

トニョは、顔も上げずにそれをメモした。イレーネさんは、ファイルをむねにだいて、戸口でまっていた。やっぱり意見は言わない。その午後の店には、意見を言わない人がふたりいて、さらにマラさん。マラさんは大きな声で意見を言わない人だから、けっきょく、わになって回りながら計画を決めた：

1. 店 → ふんすい：あんないはフリータ。
2. ふんすい → かど：あんないはグニ。
3. かど → 中庭：あんないはノア。



ミニぶたいを持ち上げる前に、フリータが言った。

「ひとこと」

予告はなかった。ぼくの前に立った：ミニぶたいの前でも、ノアの前でも、ドアの前でもなく、ぼくの前に。うでを体にぴったりつけて、にげないようにしばってあるみたいに。

「水曜日、ノアにしかわからない指示を出して、そのあと、グニがまいごになったって言った」

それだけだった。それで十分だった：何があったか、だれがやったか、だれにやったか。ぼくなら、同じことを言うのに、1ページと、下に星じるしの注がいっただろう。

フリータの足を見た。フリータの足は、行くためにできている。話していると、どちらかはもうほかのところへ行っている。こんどは、ふたつとも止まっていた。くっついて、タイルにサイドブレーキをかけて止めたみたいに。ぼくのうしろでは、ノアが、もう持ち手に手をかけたまま、じゃまをしないように、ものすごく熱心に地面を見ていた。トニョのえんぴつは、用紙の1センチ上で止まっていた。

「わかった」とぼくは言った。

木曜日にノアにならった。ちゃんと、ぜんぶ言えた。

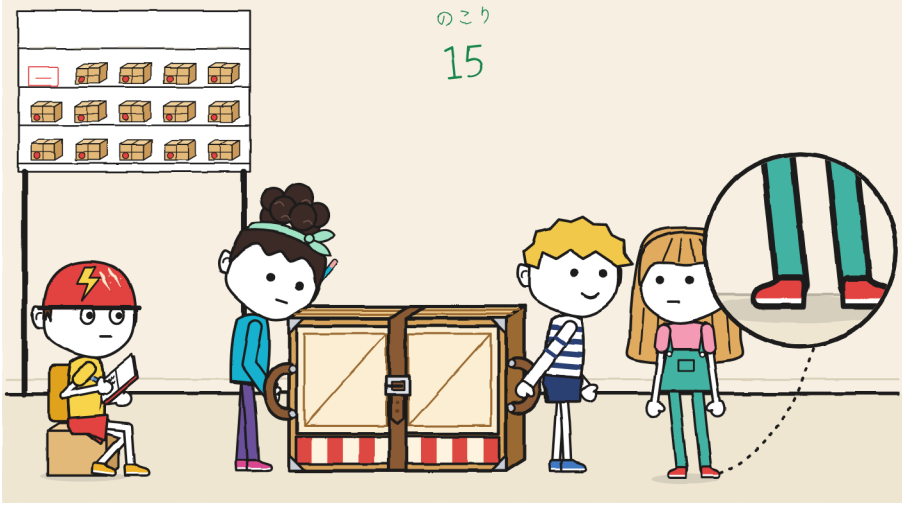
それに、質問をひとつしないと何も受けとれないぼくは、ひとつした：

「魚は、どっちのひれがないの？」

「左がわ。来たときに」とフリータは、答えをおぼえてきた人みたいに、考えずに答えた。「ふんすいで、左に曲がる。5歩前に言う」

「それは指示だね」

がわと、場所と、予告があった。ノートにそのまま書いた、「来たときに」もいっしょに。それこそ、水曜日にたりなかったものだった。



足がふたつとも止まっていた。絵で確(たし)かめて。 —J.

区間1。ノアは、ベルトを2つめの穴(あな)にとめた。ぼくは、3つめのほうがもつと言った。

「3つめだと、はずれるのがおそい」とノアは言った。「着いたとき、急ぐのに」

1回、大きな声で言って、それでおしまい。持ち手の重さは同じだった。

出発した。イレーネさんは、いちばんうしろ、10歩はなれて、ファイルを持って。トニョは、車道を、自転車をおして、目は手首に。フリータは3歩前で、小さな広場の入口で、左に腕(うで)を上げた。

「5歩…！ 左に曲がる！」

「ベルト！」とノアが言って、おさえた。

かたひれの魚のまわりを、いつもやっていたみたいに回った。ぼくの側からは、魚にはまだひれが全部あった。もう、信じないことをおぼえていた。カチは、ひとつもなし。

「区間1：6分」とトニョは言った。「やりなおし：なし」

ふんすいで交代した。フリータとノアが持ち手に。ぼくは、手があいた。人生ではじめて、えんぴつ以外のものをあんないした。

じゅんびはしてあった。前の晩、机のライトの下で、せまい道を地図ではかった：ふちいし2つ、でっぱった玄関、がたがたするマンホール、横断歩道。ふたりの近道は、線のないところをななめにわたる。ぼくのは、ふちいしをおりて、横断歩道をわたって、また上がる：9歩多くて、「とまれ」が2回ふえる。ぜんぶ番号をつけた。でも、地図には、おばさんがいない。

ぼくは、こうあんないする：

「3歩。とまれ。ふちいし。上がる。2歩。とまれ。おばさん」

おばさんは、買い物のカートを引いて、正面から来た。

「こんにちは」

あいさつが返ってきた。ぼくは手を下ろさなかった。

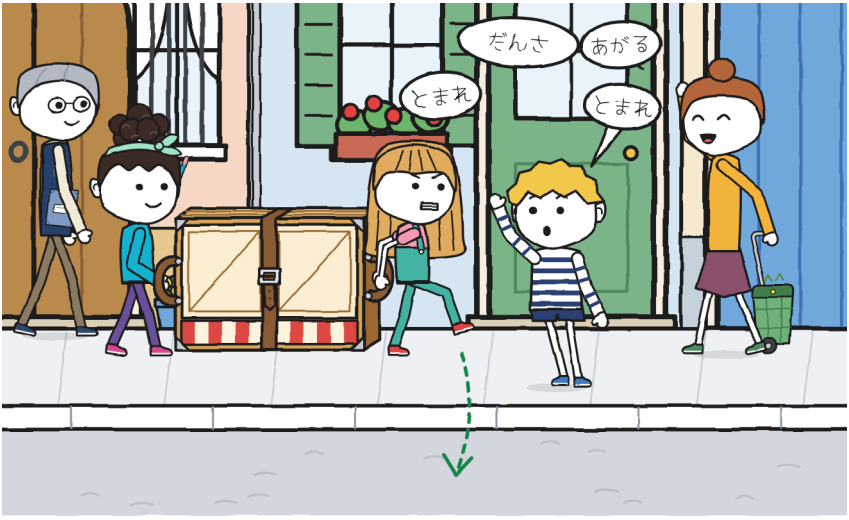
「おばさんが通ります。4歩」

横歩きで進んだ。カニや交通整理の人みたいに、片手を上げて。上げた手は、交通整理の人がたったひとつ持っているもので、バスもそれに従う。「とまれ」は、水曜日にイレーネさんから聞いた：イレーネさんは、どっちへとは言わない。ふちいしがあると、「とまれ」と言う。あのときは、ちょっと足りないと思った。あんないする場所から見ると、たくさんだ：ふたりと、ぶたいと、いざとなればおばさんも、いっぺんに止めるたったひとつの言葉。

「とまれ。マンホール。ふちを通る。まん中は、ふまない。2歩」

フリータは、持ち手を持って先頭にいて、ひとこともしゃべらなかった。フリータとしては、ニュースだ。足が、ひとりでに近道のほうへ行った：ななめに出て、知っている家のベルに手がのびるみたいに、ちょっと宙にういて、ぼくの線にもどった。ぼくのほうに、もどした。4回見た。4回めに、くちびるをかんで、かどまで、もうはなさなかった。

ノアは、うしろで、くちびるを動かしていた。歩数を数えているんだと思った。いつもそうだから。車道では、トニョが時計を見て、ぼくを見て、また時計を見て、合わない2つをくらべる人みたいだった。



「とまれ。かど」

着いた。だれも、もどらなくてよかった。

「区間2：11分」とトニョは言った。「ぼくがはかった中で、いちばんおそい。やりなおし：なし」

11分は、長い。どうでもよかった。分のことはトニョが書いた。もうひとつは、ぼくが、すり切れないように、小さな字で書いた：ぼくがはじめて何かをあんないして、やりなおしがなかった。

「『とまれ』、14回言ったよ」とフリータが言った。

「数えてた」とノアが言った。「15回」

じゃあ、歩数じゃなかったんだ。

「6回は、いらなかった」とフリータが言った。「でも、ぜんぶやった」

「どれもいらなくなかった」とぼくは言った。

「6回」

トニョは、だれが正しいかは書かなかった。数字を書いた：「『とまれ』：15（数えたのはノア）」。フリータは、ペンのふたをとって、そのよこに、みどりで、イナズマのヘルメットをかぶったカタツムリをかいた。トニョは、しばらく見ていた。消さなかった。トニョの用紙には、消すものはない。

1回も言いあわなかった。歯がいたくなるほど、くいしばっていた。 —J.

区間3、かどから中庭へ。持つのはフリータとぼく。あんないはノアで、イレーネさんが全チームにくばった、ラリーの地図を持っていた。

20歩めで止まった。運河（うんが）の路地がはじまるところだ。

「出ない」

「何が出ないの？」

「この地図だと、ここに入る。ふるいドアまで。でも、わたしたちが入るのは門で、むこうがわにある」

フリータが、それを見ようと、そっちを向きはじめた。ミニぶたいぜんぶをうしろにまわして、ベルトにはだれもいない。

「下に置いて」とぼくは言った。

「ちょっと見て、すぐ行こうよ」

「先に置く。話はそれから」

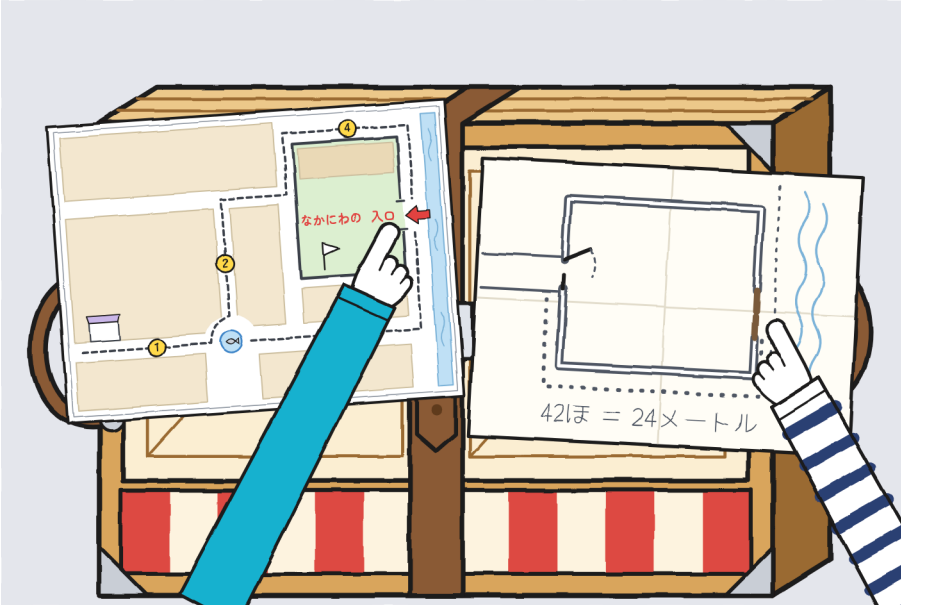
フリータは、ベルトを見て、ぼくを見て、自分のがわを下ろした。ぼくも下ろした。ミニぶたいは、歩道に、ぺたんと、おとなしく置かれた。それがいちばんいい形だ。

ぼくの地図を、フリータの地図のよこ、ミニぶたいの上に置いた。また、ぼくたちのテーブルになってくれた。木曜日からおらずに持っていて、わかる：ノートの半分を使って、上から舌(した)みたいにはみ出す。ラリーの地図には、入口が1つしかかいてなかった。赤い矢じるしがついて、門じゃなかった：ふるいドアだった。かぎのかかった、あのドア。火曜日にぼくがひとりで見つけて、2日間だまっていた、あのドア。

「ふるい地図だね」とぼくは言った。「あそこから入っていたころの」

ノアが、自分のに指をおいて、ぼくも、ぼくのに。同じ場所、2まいの紙で。

そこから門まで、ノアの歩で42歩。ぼくので24メートル。ノアの歩とぼくのメジャーがあれば、町ぜんぶがはかれる。



「イレーネさんに言う？」とフリータが聞いた。

イレーネさんは、10歩はなれて、ファイルを持っていた。ぜんぶ聞こえていたと思う。そして、ぼくたちが言うのをまっていた。だれかが話し終わるのをまつみたいに。

「ほかのチームにも」とノアが言った。「言わないと、歩きのチームがみんな路地に入っちゃう。自転車も」

土曜日の路地を想像（そうぞう）した：5チーム、それぞれ荷物をかかえて、イナズマの自転車が3台、ふるいドアの前でベルを鳴らしている。

ぼくは何も言わなかった。同意見だった。同意は、ぼうせんを残さない。

イレーネさんは、中庭のベンチにすわって、ひざの上に地図をぜんぶ広げて、赤いペンで1まいずつ直した：古い矢じるしを消して、2本かいた。ふるいドアには自転車、門には荷物。トニョは、自分のを、ぼくの地図とくらべた、線ごとに。

「イナズマは、地図のとおりに入るつもりだった」

「あなたたちは、そこから入るんですよ」とイレーネさんは言った。「自転車には、地図で合っていました。たまたま」

トニョは、自分の地図を見つめていた。何もしていないのに正しかったとわかった人の顔で。イナズマでは、それは点にならない。

かどにもどって、区間3をやり直した、こんどは門まで。持つのはフリータとぼく。ノアは、あんないも、みちあけも、しらせも、いっぺんにした：

「とまれ！ 紙をおさえる！ 通って！」

通った。メーターをうめた。「かど → 中庭」の行に、書いた：グニとフリータ、ノア、ノア、そして4つめのマスに、「ノア：『地図がまちがっている』」。名前は、それぞれの色で：えんぴつ、みどり、ターコイズ。

マスがぜんぶうまった、はじめての行だった。しらせのマスは、木曜日にぼくのために作ったもので、ノアが使いはじめた。ノアの名前を、ぼくのいちばんはっきりした字で書いた。

せなか
背中でおさえた。火曜日のきみみたいに。それはぼくが書く。 —J.

トニョが、自分の用紙を見せてくれた。上に、大きな字で、「やりなおしたところ」：

- 水曜日：ふんすいのカーブ、3回。
- 金曜日、区間1：なし。
- 区間2：なし（おそい）。
- 区間3：入口。チームのせいじゃない：地図のせい。

そして、いちばん下に、2本線を引いて：「いちばんやりなおすのは、歩数じゃない。指示(しじ)だ。」

「それは、意見だよ」とフリータは言った。

「データだ」とトニョは言った。「イナズマでは、まちがった指示(しじ)は、2回はらう。行きと帰りで」

ヘルメットをかぶって、自分のれんしゅうに行った。最初のかどで、チリン。



夜、店で、マラさんがミニぶたいを箱にしまって、箱は、ほかの箱と同じ、ただの箱にもどった。ふたが下りる前に、ノアがバックルを見た。

「あした、3つめの穴(あな)。はずれるのがおそくても」

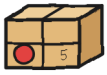
バックルを見て言った。ぼくじゃなくて。出発の前に、ぼくが言ったことだった。「かった」には書かなかった：ノアが、自分の時間に、自分で決めたことだから、それは、ちがう列に入る。

ノートを、ぼうせんの角で開いた：「ぼくぬきで きまった」の4本と、その下に、ぼくの。きょうは、1本も引かなかった。1日を、えんぴつを宙(ちゅう)にうかせて、見なおした。勘定(かんじょう)を、いいと言う前にもう一度するみたいに。数えた：ふたりと、言いあい4回。4回とも、大きな声で言った。1回、勝った。

金曜日。言いあい：4。言った：4。かった：1。

たなの上の、6ばんの箱は、まだ9つのはんこのまま。9つ。1つも多くない。

勝ったのは、言いあう前にミニぶたいを地面に置いたこと。
それはあげる。 —J.



第 5 章

一ばんに つくのは だいじ？

土曜日、ぼくは土曜日のオレンジ色のシャツを着た。ゲンかつぎじゃない：土曜日にはいろいろ起きるから、毎回同じ服で、くらべられるようにしたいだけ。

「ノートとおそろいだね」とフリータが言った。

たしかめるために、ノートをシャツにあてた。フリータの言うとおり、色が1段ちがうだけだった。

11時、中庭は、何年ぶりかで、2つのドアが両方あいていて、どちらからも人が入ってきた：自転車は、運河の路地から、ふるいドア。歩きの人は、歩道から、門。ふるいドアは、いっぱいにあいて、だれよりもおどろいているみたいだった。へいからへいへ、旗がわたされ、テーブルに「ゴール」という紙がはってあった。フローラさんは、一ばん前のせきで、ポットを

持ってすわっていた。パレードを見に来て、花火まで見ていくつもりの人みたいに。くつ屋さんは、うでを組んで立っていた。ベラさんは、パンくずをだいて。パンくずは、動くものがあるたびに首を回していて、その朝は、ぜんぶが動いていた。へいの上に、カササギが1羽。だれもまねいていない。

イレーネさんは、ベンチに上がって、ホイッスルをふいた。学校の中庭みたいな、しんとした音の下にざわざわがいっぱいある、しずけさになった。

「どのチームも、荷物をぜんぶの場所を通って、ここまで運んでください。荷物があるときは、走りません。走った人は、その区間をやり直し。そして、時間をかせぐのは、やり直さなかった人です」

一字一字、書いた。ゲームのルールが、ぼくのために書かれたように思えたのは、はじめてだった。

リストには、5つのチームが、コルクボードに画びょうでとめてあった：

1. イナズマ（ゾエ、トニョ、ブルーノ）
2. コーラス
3. チェス

4. ぬいもの

5. ノア ＋ 2

イナズマは、ふうとうを、自転車で。コーラスは、がくふだい。チェスは、大きなチェスばん。ぬいものは、頭のないマネキン。ぼくたちのは、月曜日に、ぼくを知るより前に、ノアが書いておいたものだった。

「ぼくたち、『ノア ＋ 2』だって」とフリータに言った。

「わたしが2」とフリータは言った。「あなたが、プラス」

名前と数字のあいだの、小さな十字を見た。記号だと思ったことは、いちどもなかった。役がらとして、メモした。

どのチームも、荷物がねむっている場所から出発した。ぼくたちの出発の合図は、近くに住んでいて走らない、アントニオさんがしてくれた。

店の入りぐちで、マラさんが箱からミニぶたいを出して、ミニぶたいは、道を行く大きさにのびた。ノアは、ベルトを急いでとめて、持ち上げた。

カチッ。パネルが1つ、手のひらひとつぶんだけ開いた、何かを思い出した口みたいに。

「下に置いて」とぼくは言った。

だれももんくを言わなかった。3人いっしょに、ゆっくり下ろした、中にたまごが入っているみたいに。2回めは、ノアは、あわてずに、3つめの穴(あな)に、ベルトをとめて、2回ひっぱってためした。ぼくはバックルを見て、それから道を見た。どちらも、よかった。

アントニオさんは、ベレー帽(ぼう)をぬいで、ぱっと下ろした。旗がわりに。

「ゆっくり行きなさい」と言った。「そうすれば着くから」

マラさんが、あとから、空の箱をわきにかかえて、ついてきた。中に何もないと、箱はもっと大きく見えた。



区間1。あんないはフリータ。

「5歩…！ 左に曲がる！」

「ベルト！」

かたひれの魚のまわりを、ゆっくり、かど全体を使って回っていたら、ゾエが自転車で来た。みんなの中で、いちばん先だった。ブレーキをかけて、足を地面についた。

「先に行って。これを持って走ってはいけないから」

ぼくたちがカーブを出るまで、まっていた。それから、行ってしまった。20秒のあいだ、ぼくたちが先だった。それは、ゾエが自分で時間をはかった。

ぴたっと止まった。三つあみは、ちょっとおくれた。 —J.

どの場所でも、カードにはんこをおした。パン屋のは、エリアさんで、親指に小麦粉をつけておして、カードをパン生地みたいにねかせるように、ぎゅっとおさえた。ぼくたちのカードには、白い指あとが3つ、ひとり1つ。ぼくたちが着いたときには、イナズマのカードの粉は、もうかわいていたけれど。

イナズマは、ぼくたちの前を3回通りすぎた、そのたびにちがう道から。ミニぶたいのうしろからだと、イナズマは、はと時計(とけい)みたいだった：出て、鳴って、ひっこむ。トニョは、ハンドルに両手をおいて、かどでベルをならした。ブルーノは、ふうとうを持っていた。ゾエは先頭で、場所ごとに3人そろうまでまって、そろうまではカードにさわらなかった。2回めに通ったとき、トニョは時計(とけい)を見なかった：ぼくたちを見た。その日見た中で、いちばん意見に近いものだった。

区間2は、フリータとノアが持って、あんないはぼく。コーラスが、がくふだといっしょに、ぼくたちを追いこした。走って。イレーネさんのホイッスルが鳴った。イレーネさんは、あちこちに同時にいた。コーラスは、小さな声で歌いながら、ふんすいにもどった。区間をやり直すときは、そう歌うらしい。

チェスも追いこした。チェスばんを横にして、駒(こま)を、あられみたいな音のふくろに入れて。マネキンにも追いこされた。横にされて、ぬいもののメンバー3人が、つまさきで運んでいた。マネキンがねむっているみたいに。頭のないマネキンに追いこされるのは、はかれない体験で、はかってみようとしたけれど。

フリータは走らなかった。ええと：足が出てしまった。もどした。

「一ばんに着くのは、だいじ？」と聞いた。

「ラベルには『一ばん』って書いてない」とノアが言った。「『たたんで』って書いてある」

「ふちいし」とぼくは言った。

上げた。

コーラスは、歌いながらやり直した。帰りは、音がよくなっていた。 —J.

区間3。ノアが、門まであんないした。そこで、ミニぶたいを地面に置いた。

「だれが開ける？」とフリータが聞いた。そして、答えをまった。

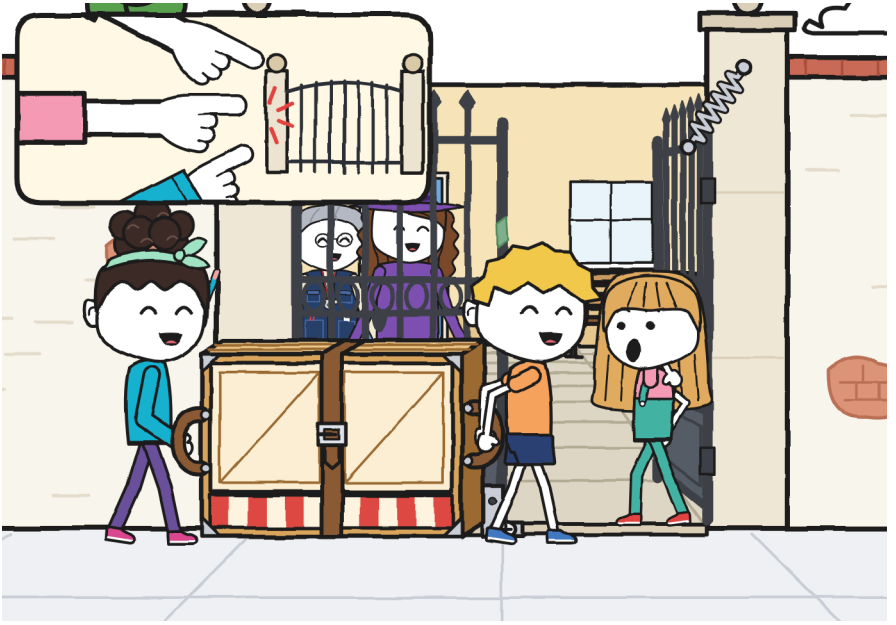
3人いっしょに指さした。その週で、3回めだった。火曜日は、それぞれが場所を指さした。金曜日は、それぞれが、ほかの人を。こんどは、3人とも、同じ場所：ノアは門、フリータも門、ぼくも門。それから笑った、そんなふうでは、だれかは決まらないから。3本のうでが、1つのドアをさしている：ドアにはとても強い意見で、ぼくたちには何もない。

「あなた」とノアとぼくは言った。

ノアは、自分の持ち手にうつった。フリータは、背中（せなか）と両手で、とびらをおさえて、足をしっかりふんばって、今回はどちらも出なかった。

「とまれ！ とびらをおさえる！ 通って！」

通った。たたんだまま。ぶじに。





「41分」とイレーネさんは言った。

イナズマは14分だった。3人は、自転車のよこの地面にすわって、あせもかいていなかった。ゾエは、2本の指でぼくにあいさつして、ブルーノは、手ぜんぶで。

マラさんは、箱をわきにかかえて来た。イレーネさんは、自分の中庭の地面の、たたんだミニぶたいを見た、ベルトも、いるべきところにある。ずいぶん長く、上から下まで見た、長い旅から着いた人が、ちゃんと全部あるかをたしかめるみたい

に。ファイルを開いて、登録の紙をマラさんに見せた：「えんげき工房(こうぼう)。せきにんしゃ：イレーネ」。マラさんは、いつものように、指でなぞって読んだ、まず行を、それからはんこを。フリータが、みどりのペンをわたした、消えないやつ。

「だいじょうぶです」とイレーネさんは言った。そして、ラベルにサインした。

ラベルに、「とどけた」ということばが出た。だれも書いていなかった。まわりには、「へんそう」のはんこが9つ、マラさんの旅ひとつにつき1つ、その真ん中に、いまは、みどりのサインが、どこにも行くつもりのない顔で。

イレーネさんは、センターの備品(びひん)の台帳を開いて、ミニぶたいを書きこもうとした。その必要はなかった：もうページがあった。上に、「おりたたみの ミニぶたい：うけとりまち」とあって、その下の、「テスト」と書いてあるらんに、古い、かたむいた、へたな字の一行があった：

「中庭でテスト。たたんだら、両方のドアを通る。広げると、通らない。—R.」

3人で、のぞきこんだ、頭のかげがかかるくらい。

「わたしが工房を持つ前のものです」とイレーネさんは言った。「だれかは知りません」

「わたしたちも」とフリータが言った。「でも、いろいろわかってきてる」

R.は、この中庭に来て、送る前にミニぶたいをためした。こんどは、2つのドアをはかった：門と、ふるいドア。R.が知っていたことは、一行におさまった。ぼくたちは、1週間かかった。

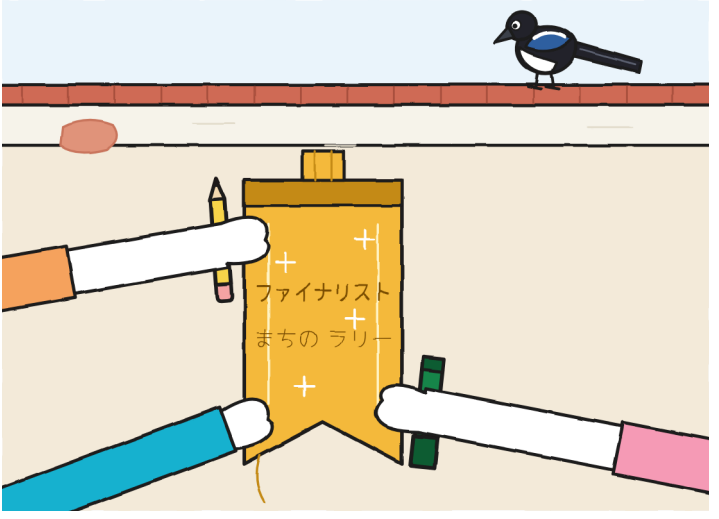
エリアさんのドア。中庭の、ふたつとも。ドアをはかる。カードのために、しまっておく。 —J.

イナズマが勝った、1回もやり直さずに。賞品は、エリアさんのパンで、上に、小麦粉の「1」。ゾエは、3つに切った。ブルーノのは、ゾエのと同じ大きさ：目でくらべた、パンのことでは、ぼくの目はまちがえない。

荷物を、ぜんぶそろえて着いたチームには、イレーネさんが、リボンをくれた。ぼくたちのは、近くで見られた、3人でおさえていたから：えんぴつの手と、みどりのペンの手と、ターコイズ色のそでと。金色のサテンで、息をふきかけるとひかりが場所をかえて、上に短いむすび目、はしの糸は、もうほ

つれはじめていた。遠くから読める字で、「ファイナリスト・ご近所ラリー」と書いてあった。

へいの上で、カササギが首をかしげた。ぼくが、わからない地図の前でするのと同じだ。



「ファイナリストって、いちばんあとに着いた人のこと」とフリータが言った。

「いちばんさいごまで着いた人のこと」とノアが言った。

「さいごまで、いちばんあとに着いた」とぼくは言った。「どっちにもあてはまる」

「せっかくだから」とイレーネさんは言った。「使ってみましょう」

マラさんとふたりで、手を横棒に、開いた。カチッ、カチッ、カチッ。その週で、わざと開くのをはじめて聞いたけれど、同じ音だった：ミニぶたいには、どうでもいいらしい。

ぼくたちは、うしろ。2分で、劇を作らなくてはならなかった。ノアが、役をくばった。その前に、聞いた：

「あまりしゃべらないのが、いい人は？」

手を上げた。ラリーで、いちばん速い手だった。

パンくずが、ベラさんの手をはなれて、1メートルとんで、パネルの上にとまった、とてもぴんとして、しっぽを、まどの前にたらして。その週、そのわくには、口がいっぱいのトニョ、道のまん中のノア、盤の前でねているアントニオさんが見えた。いまは、パンくずのしっぽ。わくには、そこにあってはいけないものを見のがさない目がある。劇だった、まだはじまっていないのに。

ベラさんは、うでをのばして、パンくずをつかまえて、パンくずはおとなしくなった、「ぼくじゃない」という顔で、はじめの日にぼくからうつった顔だ。

劇のなまえは、「はいりたがらない にもつ」。フリータは、マラさんのやくで、かみのとんがりぼうしをかぶった。ノアは、ぜんぶのドアのやくで、足をかえるだけで、ぜんぶちがうドアになった。ぼくは、にもつのやくで、まどからかおを出した。

「こうぼうは？」とノアが言う。「ここは、ぬいものです」

「へんそう」とぼくは言う。

「こうぼうは？ ここは、コーラスです」

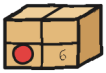
「へんそう」

9回言った。お客さんは数えていた、コーラスも、そのために来たのだから、音程をとりながら数えた。10回めに、ノアがうでを広げて、ぼくは、もうひとつのことばを言った。

あいさつのとき、3人でまどから顔を出した。おさまった。ぎゅうぎゅうで。ぼくの左耳は、フリータので、右は、ノアのおだんごので。下では、マラさんが、ほんもののぼうしで、2本の指で、はくしゅしていた。

切りわけない。ぎゅっとなる。 —J.


6ばん



第 6 章

テストが おわったら、なにが のこる？

午後、ラベルを持って、また店にもどった。ノアも来た。戸口に立って、メモ帳をぶらさげて、たなの荷物を、指とくちびるで、声を出さずに数えていた。

フリータは、はり紙を見た。それから、マラさんを見た。

「いい？」

「あなたの紙だよ」

青いいすに上がって、15を消して、大きく、14と書いた。マラさんは、ラベルを自分の帳面にはった、ほかの5まいといっしょに。そして、シーツをのばすみたいに、上から2回なでた。

戸口で、ノアが数え終わった。

「14」と、だれにともなく言った。

「14」とフリータが、いすの上から言った、ペンのふたをあけたまま。

トニョは、順位表を持ってきた。地域センターのはんこがおしてあって、ぼくがノートにうつすために：イナズマ、14分。チェス、29分。ぬいもの、33分。コーラス、38分（1区間やり直し）。ノア ＋ 2、41分。2回見た。「ブルーノ」は、そのまま、消されずに、何も上にかいてなかった。ぼくたちのチームのところは、ノアが、ターコイズ色のえんぴつで、だれにも言われずに直した：「＋ 2」を消して、上に、ノアとフリータとグニ。

「月曜日は、あなたたちの名前を知らなかったから」とノアは言った。「ええと。グニの名前を」

R.のカードを出した。手がかりは11こ。1つ足した：「12. 送る前に、センターの中庭で、ミニぶたいをためした。台帳にのっている。」トニョは読んだ。下の、自分のところも読んだ。「みかいけつ：ぼくに説明をする」。そして、インクにさわらずに、指を下になぞった。何も消さなかった。

「ミニぶたいは、ためした」とトニョは言った。「ぼくのベルは、ためしてない」

「それは、わからないよ」とフリータが言った。

「ぼくのベルのことは、どの台帳にも、一行もない」とトニョは言った。それも、本当だった。



それから、カウンターで地図を広げた。ええと：もうたたんでなかった。木曜日から、ノートの中で、ひらいたまま持ち歩いて、上からはみ出していたけれど、おり目は残っていた、十字に、まどみたいに、それは消えない。地図は、どう持たれてきたかをおぼえている。

メジャーを一つのすみにのせて、えんぴつ立てをもう一つのすみにのせて、おさえた。

「きみの分が、足りない」とノアに言った。「ふんすいから先のこと。そっちの道は、ぼくはメートルしか知らない」

その言葉は、れんしゅうしていなかった。考えていた、それはちがう：劇（げき）のあいだに、まどから顔を出して、6回めの「へんそう」と7回めのあいだに。

ノアは、フリータを見た。フリータは天井を見た、それはフリータが首をつっこまないやりかたで、店の天井が、これまで一度もかせいだことのない関心で、見ていた。

「これに、かいていい？」

「そのために見せたんだ」

地図を、両手でノアのほうにおした。ノアは、耳のうしろからえんぴつをぬいて、しばらく上にもったまま、紙にふれずに、よその家のドアをたたく前に手が止まるみたいに。それから、下ろした。

ほかのえんぴつがこの紙にふれたのは、これがはじめてだった。ターコイズ色の先が下りるたびに、ぼくは、メジャーを、すみにちょっと強くおさえた、地図はどこへも行くつもりがなかったのに。フリータは気づいて、何も言わなかった、それは、フリータにとって、とてもさわがしい気づきかただ。

ノアは、自分の道を足した、センターの中、部屋と、中庭と、その2つをつなぐ廊下、それに、歩数での距離。小さくて、まっすぐな字で書く、1文字が、1まいのタイルにおさまるみたいに。ぼくは、メートルをよこに書いた。「ふんすいから、わたしのうちの入口：80歩」とノアは書いて、ぼくは、よ

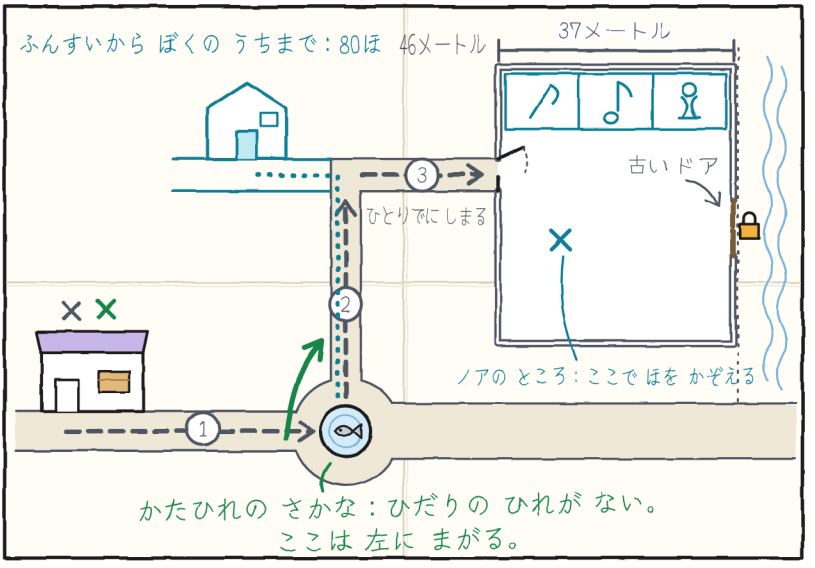
こに：「46m」。80かける58は、46メートル40。ぼくは、れいぎとして、切りすてた。ぼくの地図には、はじめて、2つの単位があって、どちらもまちがっていなかった。中庭に、ノアは、ターコイズ色の小さな十字をつけた：「ノアの場所：ここで歩数を数える」。

フリータは、がまんできなかった。ペンのふたをあけて、ふんすいのそばに、みどりで、ゆるしも聞かずに書いた：「かたひれの魚：左のひれがない。ここで、左にまがる」。店のところに、十字が2つついた、えんぴつのと、みどりの、くっつくくらい近く。

上には、「グニの ちず」と書いてあった。その下に、新しい名前を書いた：「ご近所の ちず（3にんの）」。かっこは、ぼくの思いつきだった。かっこは、ぼくがいちばん得意なものだ。

そして、ふたりがかいているあいだに、かたひれの魚の話を聞いた。ふたりいっぺんに話してくれた、カウンターの両がわから、ぼくは、テニスの試合を見るみたいに、ふたりを行ったり来たり。長い話だ。みんなが言うほど、おもしろくはない。でも、いまは、ぼくも知っている。

まちの ちず（3人の）



すごくおもしろい。ただ、ぼくたちが、へたに話した：話が重なったんだ。 —J.

フリータは、昼から、リボンを手首にむすんでいた。もう糸が3本ほつれていた。数えたのは、フリータも、サロペットのポケットにひっかかるたびに、小さな声で数えていたから。

「わたしが持ってると、月曜日には、ふさになる」とフリータは言った。「ノートにしまおうか？」

1ページめの、「シェア」の下、半分のページを使うみどりの字の下に、はった、両はしに、セロハンテープをひとつず

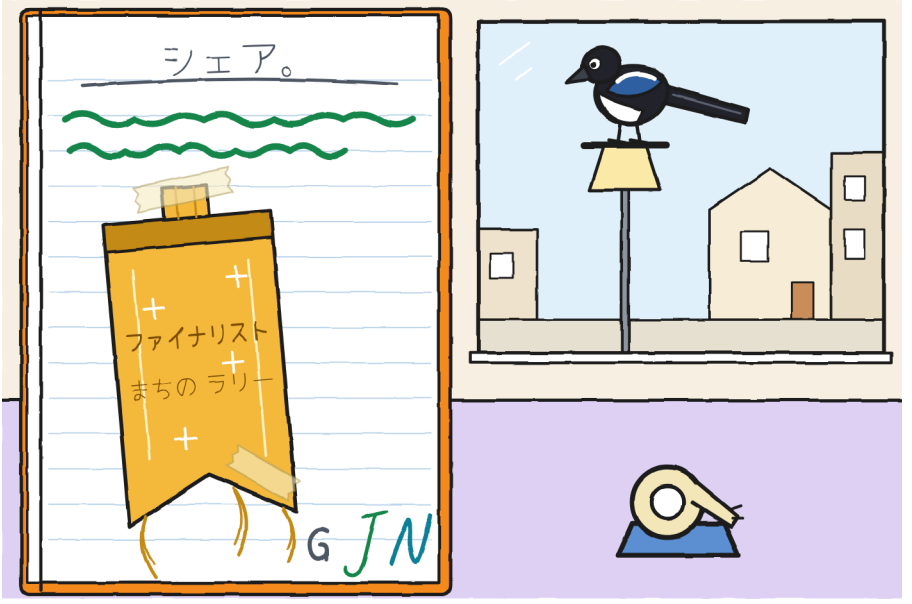
つ。ノアが一方のはしをおさえ、フリータがもう一方を、ぼくが、2つのテープを、まっすぐはった。むすび目は、上、ちょっとふくらんで。光は、となりのページをめくる人がいるたびに、場所をかえた。すみに、小さな頭文字を3つつけた：G、えんぴつで。J、みどりで。N、ターコイズ色で。

ノートをとじてみた。とじにくくなった：むすび目がふくらんで、表紙が、一つのすみで少し持ち上がって、まるで、まだ行くのをやめていない人みたいに。「欠点」と、はしにメモして、それから消した。

糸のほつれたところも、そのままかいた。ほどけるなら、ほどける：もっと新しくは、かかない。

窓（まど）ガラスのむこうで、へいのカササギが、街灯からぼくたちを見ていた。リボンを見ていて、ぼくたちじゃない。わかった、ぼくなら、カササギの立場で、同じものを見ただろうから。

ぼくのノートは、きみのほどうまくとじない。だから。 —J.



ノアは、ページをうしろにめくった。その前に、ゆるしを聞いた、ノートの上に手をひろげて、ふれずに、ぼくはうなずいて、いいよと言った。ゆっくり、1まいずつ、とばさずにめくった：火曜日のメーター、水曜日のみどりの行、へいの切れはしと、半分のかぎがある、さいごのページ、木曜日の新しいマス。ぼうせんのすみに着いた。

「これは？」

手が、ちょうどかくせる距離（きょり）にあった。動かさなかった。

「まちがえて数えていたもの」

「じゃあ、こっちは？」声に出して読んだ：「『門は、石でもおさえられる』」

「火曜日に思った」

フリータは、いすにぶつけていた足を止めた。トニョは、箱から、何もはかっていない時計（とけい）から、目を上げた。

「石は、『ふちいし』って言わない」とノアは言った。「それに、『とまれ』を15回も言わない」

ノアが物ごとを言うときのやりかたで、数えながら言った。それから、ページを前にもどして、またリボンのところへ、本を見つけたところにもどす人みたいに。

ぼうせんは、消さなかった。えんぴつだから消せるけれど、消したくなかった。文の下に、小さな石を一つかいて、ふきだしをつけた。中は、空っぽにしておいた。

消さないで。ちょっとだけ、ぼくのだから。 —J.

日曜日、夜明けに見はったのは、センターの向かいに住んでいるノアだった。9時に、店にメモを持ってきた。歩数を数えながら来た：くちびるでわかった。3つに同じ大きさでおって

あった：たしかめた。ターコイズ色で、小さくてまっすぐな字で、こう書いてあった：

- 7じ38ふん：ミニぶたい、工房（こうぼう）の中、たたんだまま。
- 7じ44ふん：夜が明ける。動かない。
- 7じ50ふん：そのまま。歩いた歩数：ゼロ。ーノア

ぼくより見はりがうまくて、ぼくより数えるのがうまくて、
パンは作らない。3つのうち、2つ。 —J.

マラさんは、シャッターを半分上げて、ぼくたちを通してくれた。ぼくは、たなをかいた：14この荷物と、6つのあき、1から6まで続いて、歯が順番にぬけたみたいに。はり紙には、さわらなくてよかった。

「6」とマラさんは言った。そして、帳面を閉（と）じた。

トニョは、自分の箱にすわっていた、ヘルメットをかぶって、日曜日なのに。ノアは、戸口のよこに立ったままでいた。すわれとも、行けとも、だれも言わなかった。来たいから、来たのだ。そして、月曜日には、れんしゅうがある。

ノートを終わらせるために、ミニぶたいのまどを、空っぽのまま、かいた。

じょうぎを使った：わく、よこに寄せた短い幕、木のもくめ。中は、何もなし。その週で、はじめて、だれも、たまたま通らないまどだった。そのままにしておくのが、ちょうどいい気がした、階段のところに人の気配がするときに、ドアをあけておくみたいに。

まず、ぼくをかいた、えんぴつで、はしに、写真でぼくが立つところに。自分をかくのは、いちばんむずかしい：外からはかれない。まじめな顔で、かみがきれいにととのった：ほんとうのぼくじゃなくて、こうなりたいと思っている、ぼくだ。直さなかった。場所は、たっぷり空けた。

それから、ノートを、カウンターにあけたまま、ふたりのほうに向けて、えんぴつをななめにのせておいた。何のためかは、言わなかった。マラさんは、うしろで、見なかった：インクのびんを、いらないほど気をつけて、ならべはじめた。

ノアは、ぼくのノートにかく前に、ゆるしを聞いた。フリータは、聞かなかった。

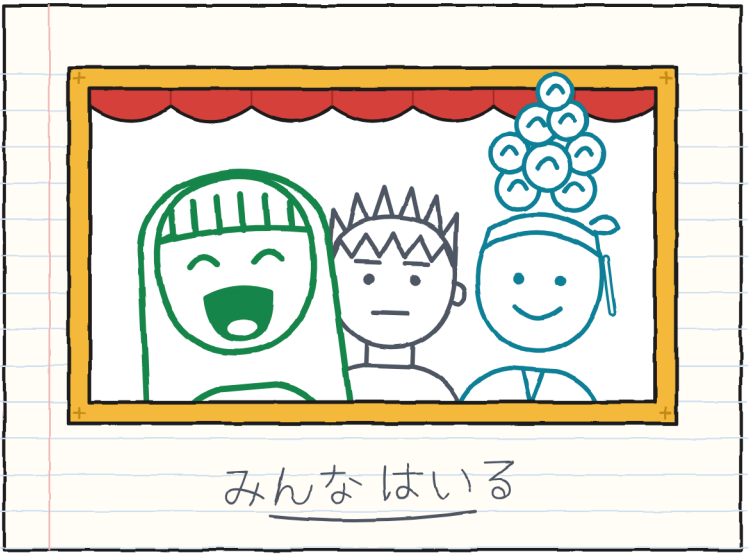
フリータは、自分を、みどりでかいた、口をあけて、ほかの2人より大きく、だって、フリータが言うには、ほんとうでも、場所をとるから。ノアは、のこったすきまを、2本の指で

はかった、小さなものをはかるときのやりかたで、そして、その中に、ターコイズ色で自分をかいた。おだんごは、わくの上からはみ出た。直さなかった。ノアには、わくが、上のほうで小さいのだ、そして、ノアはそれを知っている。

土曜日、ほんとうのまどには、おさまった、ぎゅうぎゅうで。紙のまどは、ぼくが場所をたっぷりかいたのに、やっぱりぎゅうぎゅうになった。たっぷりの場所は、だれも使わなかった。

下に、えんぴつで、1つのことばを書いた：

はいる。



シェアは、シェア。1ページめに書いてある。 —J.

さいごに、表が残っていた、ぼくのノートを、いつも終わらせる表。こんどは、区間ごとにつくった、1週間ずっと、そうやってはかってきたから。

はいたつ 6ばん。区間ごと（もつ人 ・ あんないした人 ・ やり直したこと）：

- 店 → かたひれの魚のふんすい：グニとノア ・ フリータ ・ ふんすいのカーブ（3回）。
- ふんすい → かど：フリータとノア ・ グニ ・ なし（でも、ゆっくり）。
- かど → 中庭：グニとフリータ ・ ノア ・ 入口：地図がふるかった。
- 土曜日：3人 ・ 3人、じゅんばんに ・ ベルト（2回めは、3つめの穴（あな）で）。
- ぼくたちの前：マラさん、ひとり ・ だれも ・ 9回の旅。
- R.：？ ・ ？ ・ わからない。

いちばん下に、3にんメーターをかいた、4つのマスが全部うまって、3人の名前の場所は、入れかわって。

3つのマス。ええと、4つ。名前は3つ。あいている所は、ひとつもない。 —J.

ありえない はいたつ ・ 7

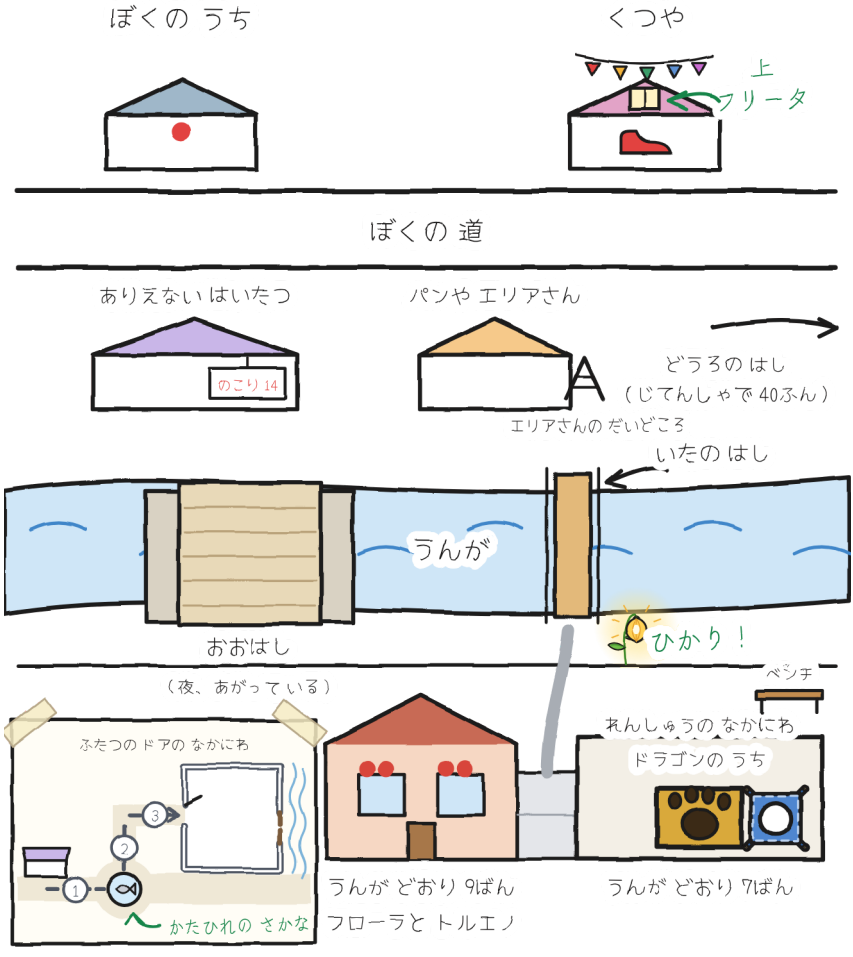
（もうすぐ）



こんどのラベルは、ぼくがもうパジャマの時間を言っていた。

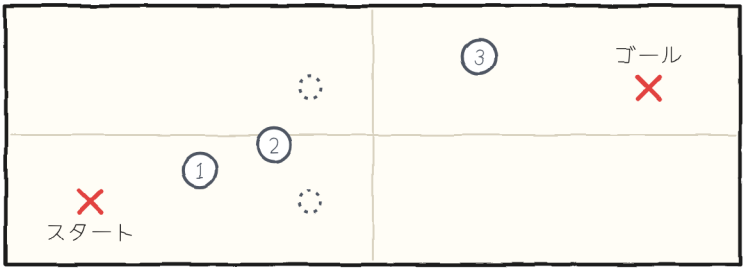
ほかのみんながしめるころ、だれがおきている？わたしのほかに。 —J.

まち（6ばんの ばん）


ぼくの うち
くつや
上
フリータ
ぼくの 道
ありえない はいたつ
のこり 14
パンや エリアさん
A
どうろの はし
（じてんしゃで 40ふん）
エリアさんの だいどころ
いたの はし
うんが
おおはし
ひかり！
（夜、あがっている）
ベンチ
れんしゅうの なかにわ
ドラゴンの うち
ふたつの ドアの なかにわ
3
2
1
かたひれの さかな
うんが どおり 9ばん
フローラと トルエノ
うんが どおり 7ばん

きみの みち

だれがはこぶ？だれがあんない？だれがみちをあける？だれがしらせる？

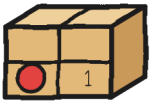


3にんメーター

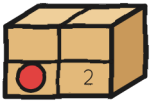
	もつ	あんない	みちあけ	しらせ
くかん 1				
くかん 2				
くかん 3				

ひとつのらんにいつもおなじなまえが出たら、かえてね。 —J.

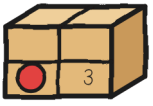
ありえない はいたつ



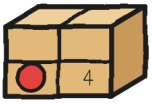
1・このにもつは かみつく



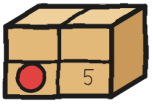
2・かみなり まえに あけるな



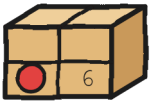
3・へんそう、おねがいします



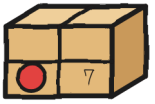
4・ここじゃ ダメ、パンくず！



5・ふたりで ひとつの ケーキ



6・ばしょは さんにんぶん



7・（もうすぐ）

のこりは 14。 −3.

ひとつの おはなし、六つの サイズ

この本には六つのサイズがある。3さいから16さいまでで、ことばは20いじょう。XXS、XS、S、M、Lは同じ絵で、物語を一ページずつ語り、サイズが上がるごとに、細かいところまで話すようになる。XLは小説だ。同じ物語に、グニが心の中で考えても口には出さないことのための場所がある。

CEFRのレベルは目安です。XXS：pre-A1・XS：A1・S：A2・M：B1・L：B2・XL：B2–C1。

それぞれのサイズで。おなじミニぶたい。 —J.

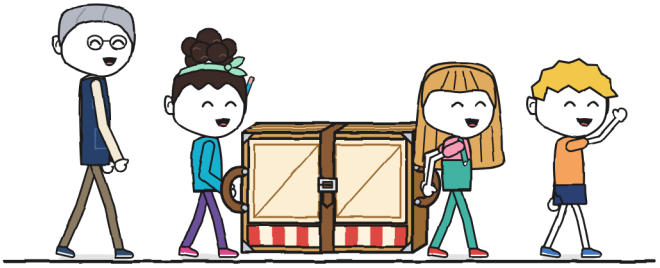
かぞくと せんせいへ

linguaula.comでしょうごとにれんしゅう（Lサイズの練習問題つき）

ほんとうにはこぶとき：どうする

1. 出る前に、みちをぜんぶ見る。
2. ひとりは手があいている：ドアをあけて、しらせる。
3. 手はとってに。ちょうつがいとロックからはなす。
4. にもつをもったらはしらない、きょうそうしない。
5. だれかが「とまれ」と言ったら、みんなとまる。
6. まずゆかにおく。はなしあうのはそれから。
7. 大きいものは2人であけてたたむ。おとなといっしょに。

「おはなしのなかだけ」のはんこは、お話の中では起きても、ほんとうにはこぶときには起きないことのしるし。



みちのことで知っていることがあれば、先に言って。 —J.